

御所野遺跡Ⅲ

2006.3

一戸町教育委員会

一戸町文化財調査報告書第53集

御所野遺跡Ⅲ

2006.3

岩手県二戸郡一戸町
一戸町教育委員会



遺跡全景（南より）



遺跡中心部（東より）



II b調査区全景



V調査区全景 (西より)



Ⅱb調査区東部（東より）



Ⅱa調査区柱穴群



FD58-2掘立柱建物跡（南より）



FG62-2掘立柱建物跡（西より）



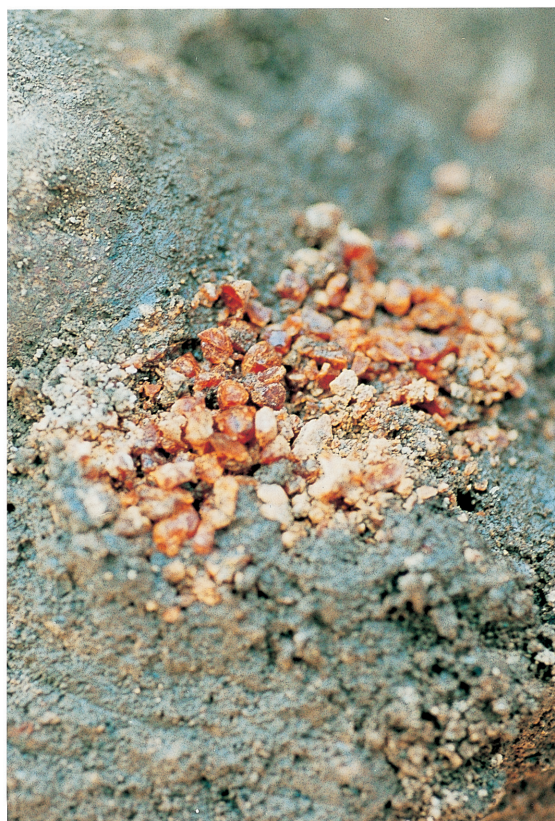
FG62-1掘立柱建物跡（西より）



IIb調査区土坑群（南西より）



Ⅱ b調査柱45炭化種子出土状況



琥珀出土状況



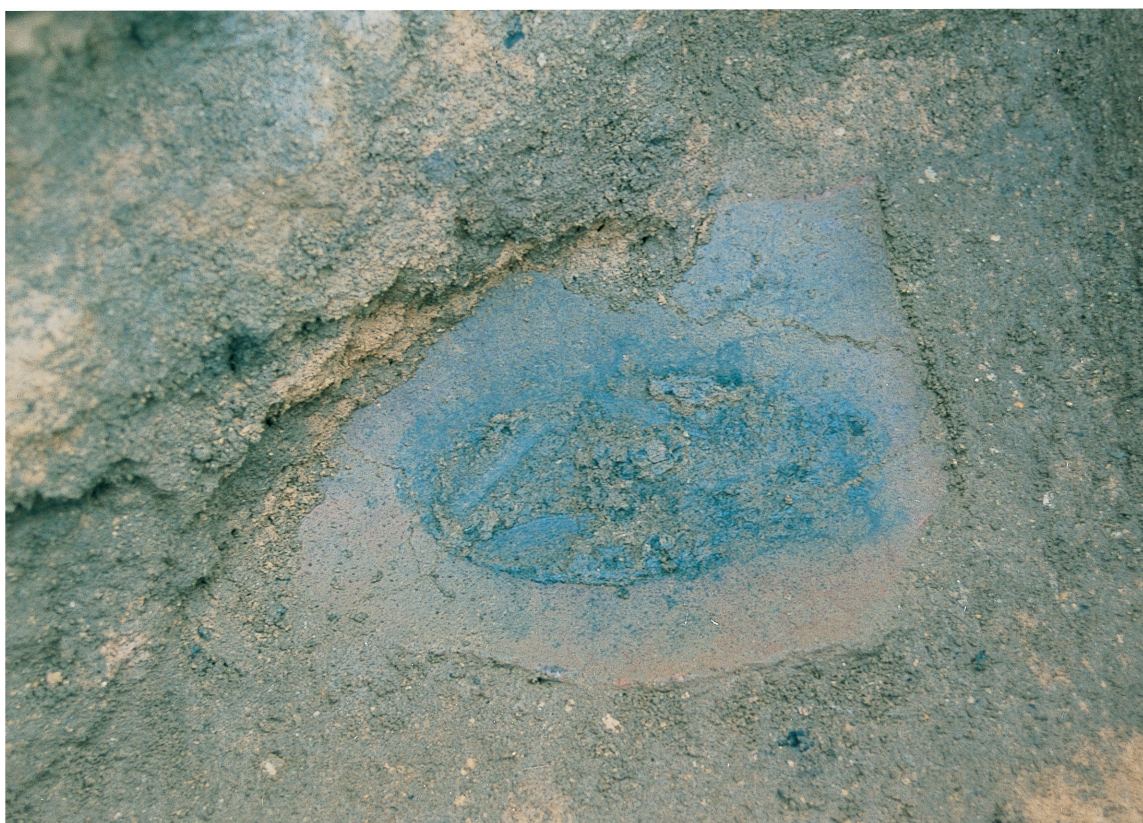
Ⅱ a調査区盛土層骨片・焼土粒



II a調査区盛土層遺物出土状況



FG64-01住居跡剥片・台石出土状況



FE54-01住居跡アスファルト付着土器出土状況



アスファルト塊出土状況

序

御所野遺跡は平成元年度に戸町の農工業団地造成に伴う事前調査として調査を開始し、間もなく縄文時代中期の重要な遺跡である事が明らかになりました。その後文化庁と岩手県教育委員会の指導を戴き保存を前提とした発掘調査を計画、平成2年度から4年度の発掘調査により極めて保存状態の良い縄文時代の大集落である事が明らかになり、平成5年12月に国史跡となりました。

指定後は史跡公園として整備する計画に基づいて発掘調査を実施、平成9年度から13年度にかけて史跡公園整備を実施し、平成14年春に御所野縄文公園としてオープンしております。開園して4年が経過しましたが入場者は間もなく20万人を突破する見込みです。今後も日本の縄文遺跡を代表する史跡公園として社会教育のため活用していきたいと考えております。

公園整備後も特に遺跡中心部の配石遺構周辺が未調査であったため、内容確認の発掘調査を17年度まで継続して実施してきました。その結果、配石遺構周辺の掘立柱建物の配置や盛土遺構の性格も明らかになり、18年度に実施する遺構復原の貴重な資料を得ることができました。それを具体化できたのは平成元年度の調査以来、文化庁をはじめ多くの機関及び研究者からご指導いただいた賜物と考えております。以上の方々に衷心よりお礼申し上げ序といたします。

平成18年3月

戸町教育委員会

教育長職務代理者 工 藤 誠

例 言

1. 本書は平成11年度から平成17年度に実施した御所野遺跡の発掘調査報告書である。
御所野遺跡関係の発掘調査報告書については平成元年度から10年度の調査成果を下記のとおり刊行している。
一戸町教育委員会1991『御所野遺跡』「平成2年度発掘調査概報」一戸町文化財調査報告書第26集
一戸町教育委員会1992『御所野遺跡』「平成3年度発掘調査概報」一戸町文化財調査報告書第29集
一戸町教育委員会1993『御所野遺跡Ⅰ』「縄文時代中期の大集落」一戸町文化財調査報告書第32集
一戸町教育委員会2004『御所野遺跡Ⅱ』一戸町文化財調査報告書第48集
2. 遺跡名・遺跡略号・所在地は次の通りである。
遺跡名・御所野遺跡
遺跡略号・G S N
所在地・岩手県二戸郡一戸町岩館字御所野
3. 野外調査、整理作業について次の方々、機関から御指導・御協力を賜った。
文化庁、岩手県教育委員会、岡村道雄（独立行政法人奈良文化財研究所）、岡田康博（文化庁）、西本豊弘（国立歴史民俗博物館）、辻誠一郎（国立歴史民俗博物館、現東京大学）、熊谷常正（盛岡大学）、山田昌久（東京都立大学、現首都大学）、小杉康（北海道大学）、石井寛（横浜市埋蔵文化財センター）、桐生正一（滝沢村教育委員会）、稲野彰子、村本周三（総合研究大学院大学）
4. 調査主体者 一戸町教育委員会
5. 発掘調査の体制
平成11年度 総括：柴田俊春（教育長）、相ノ山健（生涯学習課長）
調査担当：高田和徳（生涯学習課長補佐）、久保田滋子（発掘調査員）
平成12年度 総括：柴田俊春（教育長）、高田和徳（生涯学習課長）、大平賢一（同課長補佐）
調査担当：高田和徳（生涯学習課長）、久保田滋子（発掘調査員）
平成14年度 総括：秋元弘子（教育長）、高田和徳（生涯学習課長）、四日市篤（同課長補佐）
調査担当：高田和徳（生涯学習課長）、久保田滋子（発掘調査員）
平成15年度～17年度 総括：秋元弘子（教育長）、高田和徳（生涯学習課長）、四日市篤（同課長補佐）
調査担当：高田和徳（生涯学習課長）、中村明央（主任）
6. 報告書作成の体制
総括：秋元弘子（教育長）、高田和徳（生涯学習課長）、四日市篤（同課長補佐）
調査担当者：高田和徳（生涯学習課長）、中村明央（主任）、久保田滋子（発掘調査員）
事務：山口純子、工藤雅子
室内整理：関上キヨノ、外岡レイ子、沢久保智恵子、野辺地智代子、市橋光子、苗代澤優子、山田梅子、
峠ツエ、木村由美子、八戸美奈、澤口亜希、高橋とも
7. 本書に掲載している図示表現は次の通りである。

焼土  炭化種子  粘土  硬化面  地山  内黒 

8. 本遺跡から出土した遺物について次の方々から鑑定していただいた。

炭化植物遺体：辻誠一郎（国立歴史民俗博物館）、辻圭子・大松しのぶ（早稲田大学大学院）

植物珪酸体：村本周三（総合研究大学院大学）

種子類の14C年代測定：小林謙一・坂本稔、新免歳靖（国立歴史民俗博物館）、辻誠一郎・松崎浩之
（東京大学）、村本周三（総合研究大学院大学）

骨角製品と焼骨：西本豊弘・浪形早季子（国立歴史民俗博物館）

動物遺体：パリノ・サーヴェイ株式会社 東京都中央区日本橋本町1105

9. 本書はⅣ章1～2、Ⅵ・Ⅶ章を高田が、その他は中村が執筆し編集した。

10. 本遺跡から出土した遺物は御所野縄文博物館に一括保存している。

目 次

I. 遺跡の位置と環境	
1. 遺跡の位置	2
2. 地形・地質	2
3. 遺跡の基本層序	2
II. 調査の経過	2
III. 縄文時代の調査結果	
1. II a 区	
(1) 竪穴住居跡	3
(2) 土坑・陥穴	12
(3) 掘立柱建物跡・柱穴群	14
(4) 盛土	15
2. II b 区	
(1) 竪穴住居跡	28
(2) 土坑	32
(3) 掘立柱建物跡・柱列・柱穴群	34
3. III 区	
(1) 竪穴住居跡	50
(2) 土坑	51
(3) 柱穴群	51
4. IV 区	54
5. V 区	
(1) 竪穴住居跡	57
(2) 土坑	65
(3) 配石遺構	69
(4) 掘立柱建物跡・柱穴群	69
IV. 縄文時代のまとめ	
1. 各調査区の遺構群	
(1) II a 区	86
(2) II b 区	86
(3) III 区	87
(4) IV 区	88
(5) V 区	88
2. 調査区全域の遺構分布の状況	
(1) 竪穴住居跡	89

(2) 土坑	89
(3) 掘立柱建物跡・柱列・柱穴群	90
(4) 骨片・炭化材・焼土粒などを含む堆積土	90
3. 土器	95
4. 石器・石製品	98
5. 土製品	101
6. 動物遺体	103
7. 植物遺体	103
8. アスファルト	103
9. 琥珀	103
10. 粘土	103
遺物一覧表	164
V. 古代の調査結果	195
VI. 鑑定及び分析	
1. 御所野遺跡から出土した炭化植物遺体の調査	199
2. 御所野遺跡における植物珪酸体（プラントオパール）分析	201
3. 御所野遺跡出土種子類の14C年代測定	204
4. 御所野遺跡の骨角製品と焼骨について	211
VII. むすび	213



S=1:20,000

第1図 御所野遺跡と周辺の縄文時代中期の遺跡

I. 遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境については既に御所野 I・II に掲載しているので、ここでは概略を記述する。

1. 遺跡の位置

遺跡は岩手県二戸郡一戸町岩館字御所野に位置する（第1図）。岩手県の内陸北部に位置する一戸町は総面積の70%以上を山林原野で占め、町の中央を北流する馬淵川とその支流域に小規模な集落が分布する典型的な山間地である。このうち遺跡は町北部の岩館地区に位置しており、IGRいわて銀河鉄道一戸駅から南東に1.6km、八戸自動車道の一戸インターから南に3km程離れている。遺跡周辺は南北4km、東西2kmの盆地となっているが、遺跡はその東南端の一戸段丘（洪積段丘）に立地しており、西側の段丘下は谷底平野（沖積段丘）、背後は山地へと連続している。

2. 地形・地質

遺跡は東西500m、南北120mの東西方向に長く突き出た標高190～200mの段丘面に立地している。西方500mに馬淵川、南北の崖下に根反川、地切川があり、それぞれ小谷となり、馬淵川との比高差はおよそ50m、根反川、地切川沿いは40mを越す断崖となっている。遺跡はほぼ全面が平坦で起伏もなく、東西両端でも10数mの高低差しかない（第2図）。

3. 遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は次の通りである。

I a 層：黒褐色土、表土層のうち耕作土に相当する。比較的粒子が細かい。

I b 層：黒褐色土、粒子がさらに細かく、白色の鉱物粒を含んでいる。

II a 層：黒褐色土、粒子が細かく、白色鉱物粒を多く含む。

II b 層：黒褐色土、灰白色パミス（十和田 a 降下火山灰）をブロック状に多く含む。

II c 層：黒色土、粒子が非常に細かく、白色鉱物粒を多く含む。

III 層：暗褐色土、1～5mm大の褐色パミス（中振浮石）を多く含んでいる。

IV a 層：黒褐色土、1～10mm大の赤褐色パミス（南部浮石）を多く含んでいる。

IV b 層：暗褐色土、赤褐色パミスを少量含んでいる。

V a 層：黄褐色土、八戸火山灰層。

II. 調査の経過

遺跡は指定前から整備して活用することを町の方針として決定していたため、平成5年に国史跡に指定された後も遺構復原のための発掘調査を平成6年度から平成17年度まで継続して実施してきた（平成7、13年度を除く）。

本書の報告分の発掘調査は平成11年度から17年度に実施した配石遺構周辺のものである。11～12年度には配石遺構の南側～西側（II b 区、III 区、IV 区）、平成14～15年度には北側（II a 区）、平成16年度には北側～西側（II a、V 区）、平成17年度には北側（II a 区）の調査を実施し、ほぼ配石遺構周辺の内容が明らかになっている（第2、3図）。

Ⅲ. 縄文時代の調査結果

1. II a区 (第4～11図)

II a 調査区は配石遺構群の北側に位置し、調査面積は約520㎡で、全域がほぼ平坦である。

配石遺構群の範囲内に位置する調査区南部では小判形の土坑が密集しており(第5図)、その下に竪穴住居跡や土坑が密集していることを確認している。トレンチの東端、西端に小規模トレンチ(第2-①～③トレンチ)を入れ小判形土坑群下の竪穴住居群やフラスコ土坑群の一部を調査している(第4図)。

調査区東部では骨片や焼土粒・土器片を多量に包含する盛土層を確認している(第5図)。盛土層の確認面で掘立柱建物跡などに伴う柱穴群を検出しているが、柱穴の覆土と盛土層の覆土が類似しており検出が非常に困難であったため、盛土層を調査後除去して柱穴群を検出、柱穴を掘り下げ掘立柱建物跡2棟などを検出している。また、盛土層下には竪穴住居跡や土坑が密集していることを確認しており、調査区北端、東端にトレンチ(第3、5トレンチ)を入れ、これらの竪穴住居跡や土坑群を部分的に調査している(第4図)。

調査区西部では竪穴住居群が密集していることを確認しその一部を掘り下げて調査している。

調査区全域で確認した遺構数は、竪穴住居跡24棟、土坑約70基、陥穴1基、柱穴250個にも及ぶが、完掘していないため未検出の遺構も多数あり、II a区だけで最終的に竪穴住居跡は50棟近くあるものと思われる。

(1) 竪穴住居跡

FA52-03竪穴住居跡 (第6図)

調査区北西部で周溝の一部を確認している。FA52-04住の周溝の可能性も考えられる。周溝の深さは25cm程で堆積土は1層浮石を含む黒色土、2層黒色土と褐色土の混土、3層ローム粒を含む黒褐色土となり、切り合い関係はFA52-04住、FA54-02住に切られている。堆積土からⅢ期の竪穴のように思えるが定かではない。

遺物はⅢ群土器片が出土している。

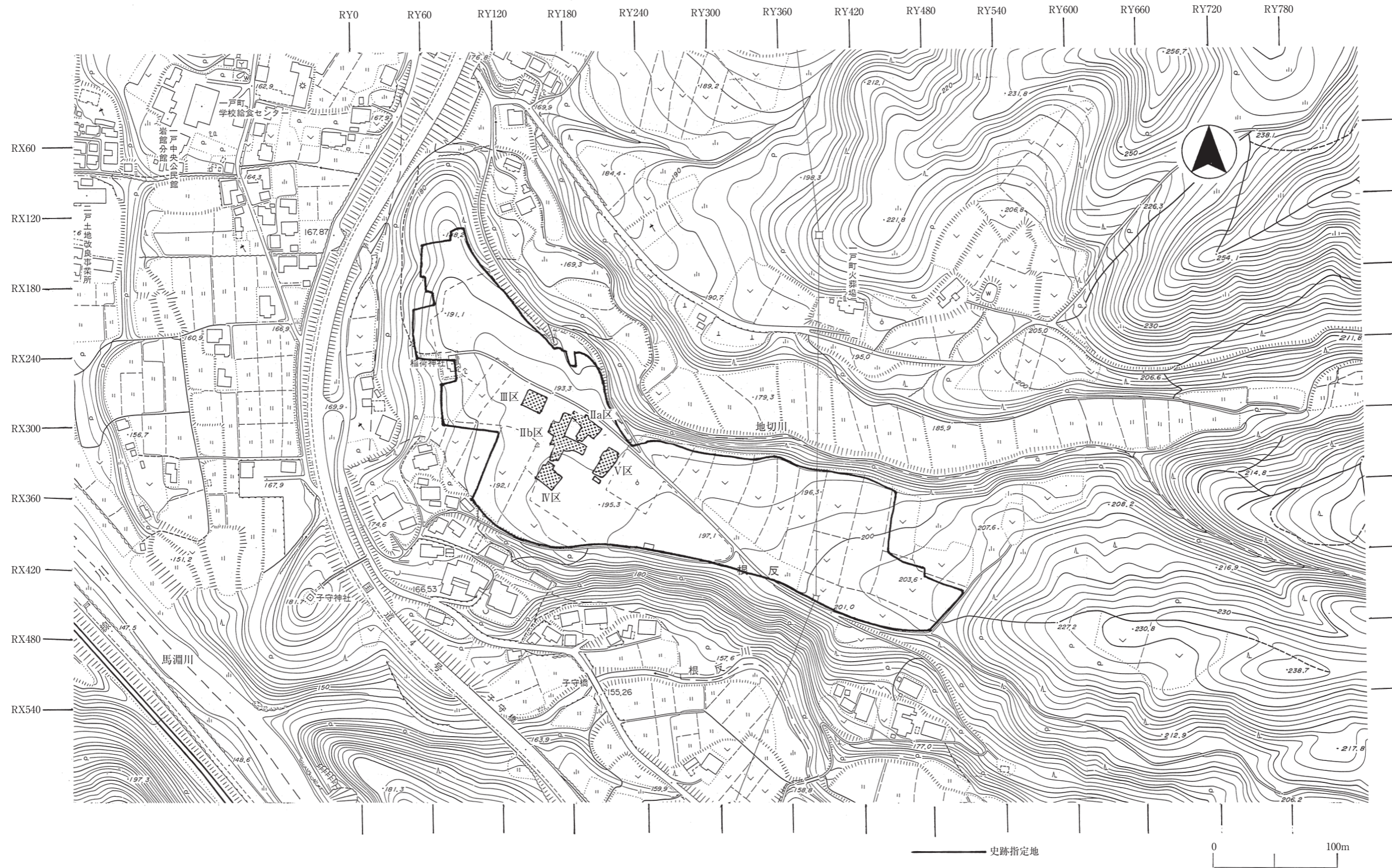
FA52-04竪穴住居跡 (第6図)

調査区北西部で確認している。住居南部の一部を床面まで調査しているが、未調査部が多く住居の規模、形状とも不明である。壁高は26cm、堆積土は1層黒褐色土と黒色土の混土、2層微細骨片・焼土粒を含む黒褐色土、3層微細骨片・焼土粒を含む黒色土となっている。2～3層は盛土層に類似するが、出土する土器片は盛土層のものに比較して大きなものが多い。周溝は深さ10cm程のものを南部で確認している。柱穴状の掘り込みはP1～2の2個検出しており、P1は深さ70cmと大規模な支柱穴で、その規模から大型住居と思われる。切り合い関係はFA52-05住、FA52-03住を切っているが、FA52-03住としたものは本住居の建替え前の古い周溝の可能性もある。

遺物は床面からV群土器、堆積土中からV群土器、ミニチュア土器1点、磨石2点が出土しており、V期の竪穴と思われる。

FA52-05竪穴住居跡 (第6図)

調査区北西部で炉と床面の一部を確認している。北側はFA52-03住に切れ、西側は調査区外に広がり、東側も未調査で、住居の規模、形状とも不明である。堆積土は1層黒色土、2層黒色土と黒褐色土の混土、3層黒色土、4～5層褐色土となる。炉は南西から北東に長さ98cm、幅78cmの台形の石組炉で北側と西側の石が一部抜き取られており、炉の中は竪穴床面より10cm程掘り込まれ焼土が形成されている。柱穴状の



第2図 御所野遺跡地形図・調査区位置図



第3図 掘立柱建物跡・柱穴配置図

掘り込みは2個検出しているが、いずれも深さ30cm弱の浅いものである。また、本竪穴の下にFA52-06住がある。炉と周辺の床面からは炭化したトチノキ種子などが集中して出土している。切り合い関係はFA54-03住、FA52-04住に切られており、FA52-06住を切っている。

遺物は床面からV群土器、堆積土中からV群土器片、盤状土製品1点が出土しており、V期の竪穴と思われる。

FA52-06竪穴住居跡（第6図）

調査区西部で住居南西部の一部を調査している。竪穴はFA52-05住床面下に広がるが未調査で、住居の規模、形状とも不明である。壁は20cm程残存している。堆積土はパミスを大量に含む黒褐色土。切り合い関係はFA52-05住に切られている。

遺物は出土していない。

FA54-01竪穴住居跡（第6図）

調査区北西部で確認している。住居は北側にさらに広がるが未調査であるし、南側も24号古墳に切られており、住居の規模、形状は不明である。第5トレンチ北壁土層セクション部での径は2.80m、壁高は25cm、堆積土は炭化材片、浮石を含む黒褐色土。炉は南西から北東へ長さ68cm、幅45cmの円形の石組炉で中に焼土が形成されている。周溝、柱穴は検出できなかった。切り合い関係はFA54-02住を切っている。

遺物は炉周辺からⅢB群土器片が出土している。

FA54-02竪穴住居跡（第6図）

調査区北西部、土層セクションで確認している。住居の一部を確認しただけで大半が未調査であり規模、形状とも不明である。土層セクションでの壁高は20cm程、堆積土は1層炭化材片、浮石を含む黒色土～黒褐色土となる。切り合い関係はFA52-03住を切っており、FA54-01住居に切られている。

遺物は出土していないが、Ⅲ期の竪穴に切られていることや堆積土などからⅢ期の竪穴と思われる。

FA54-03竪穴住居跡（第6図）

調査区北西部FA52-05住堆積土中で炉を検出している。住居の規模、形状とも不明である。炉は現地性の橙色焼土で周辺に10～25cmの川原石4個が分布しており、石組炉であったのかもしれない。焼土上面には多量の微細骨片が分布している。炉周辺は硬化しており竪穴床面があったように思われる。

遺物は微細骨片しか出土していないが、V期の竪穴（FA52-05住）の堆積土中にあることなどからV期のものと考えられる。

FA56-01竪穴住居跡（第7図）

調査区北部で確認している。住居は西側にさらに広がるが未調査であり、住居の規模、形状は不明である。壁高は10cm、堆積土は1層浮石を含む暗褐色土、2層浮石を含む黄褐色土となる。床面は貼り床（硬化面）され、深さ10cm程の周溝が部分的に巡っている。柱穴は3個検出しておりいずれも深さ40cm程のものである。切り合い関係はFB58-01～02土坑を切っている。

遺物は出土していない。

FB54-01竪穴住居跡（第7図）

第4トレンチ西部で確認している。住居はトレンチ北側、南側にさらに広がるが未調査である。調査した部分で南東から北西に径3.96mを測り壁高は南東壁5～6cm、北西壁5cm、堆積土は1層黒褐色土と明黄

褐色土の混土、1 b層暗褐色土、1 c層黒褐色土、2層黒褐色土、3層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、4層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、5層黒褐色土と明黄褐色ロームの混土、6層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土となり、1 a～1 c層は2～6層を掘り込み堆積しており、多量の土器片、微細骨片、焼土粒を含み、調査区東部で検出した盛土層に類似している。炉は住居南西に寄っているものと思われ石組炉である。径55×45cmの方形で中に炭化材片が分布しているが焼土は形成されていない。周溝は確認できないが壁柱はP 1（深さ38cm）、P 4（深さ28cm）、P 6（深さ31cm）の3個検出している。柱穴状の掘り込みは他にP 2、3、5など6個検出しているが最も深いもの（P 2）でも深さ31cmでいずれも浅いものである。切り合い関係はFB54-02住（V期）、柱174などの柱穴に切られている。

遺物は床面からⅢ群土器片が出土している。

FB54-02竪穴住居跡（第8図）

Ⅱ a区西部で確認、調査している。南西から北東に径4.26m、南東から北西に4.62mの円形を呈し南西面が直線的になっている。壁高は北東壁17cm、南西壁31cm、南東壁24cm、北西壁30cm、堆積土は1層黒褐色土、2層炭化材片、ローム粒、多量の土器片、5～30cmの川原石を多量に含む黒褐色土、3層ローム粒を含む黒褐色土となる。炉は南西から北東方向に長さ42cm、幅85cm、深さ9cmの掘り込みと径72×65cmの円形の石組炉からなる複式炉で掘り込みの西側には長さ25cm程の細長い川原石が2個壁と直行する方向に設置されている。周溝は深さ20cm弱のものが巡っており、北西部には壁から約20cm内側にも周溝を検出している。内側の周溝堆積土上面はロームで蓋がされており、竪穴は拡張されたようである。床面の西半部は硬く叩き締められ貼床されている。竪穴に伴う柱穴は4個検出しておりいずれも支柱穴と考えられ、深さは52～63cmで、柱痕も検出している。切り合い関係はFB54-01住、FB56-03住を切っている。

遺物は床面からV群土器の大型の深鉢（第39図27）、VI群土器の大型の深鉢（第41図51）、堆積土中からV群土器片、ミニチュア土器（第51図18）、石鏃10点、石錐1点、凹石3点、磨石2点、磨製石斧3点、石皿2点、砥石1点、有孔石製品1点、盤状土製品2点が出土している。

FB56-01竪穴住居跡（第8図）

調査区北西部で確認している。北部は攪乱を受けており規模、形状とも明らかではないが、東西に3.50m、南北に3.00m程の円形の竪穴と思われる。壁高は東壁29cm、南壁9cm、東壁15cmで、堆積土は1 a～1 b層微細骨片、土器破片を含む黒褐色土、2 a～2 b層ローム粒を含む黒褐色土、3～5層浮石を含む黒色土となる。床面付近には炭化材片を含み、骨が纏まって出土している。炉、周溝等は検出できなかった。骨の鑑定を東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座に依頼し形態学的観察および組織学的観察を行なったが、出土骨の状態は極めて不良であり、動物種類を識別するに至らなかった。切り合い関係はFB56-02住、24号古墳に切られている。

遺物は床面からⅢB群土器片、堆積土中からⅢB群土器片、石鏃5点、凹石2点、砥石1点、その他礫石器1点が出土している。

FB56-02竪穴（第8図）

調査区北西部FB56-01住覆土中で炉を確認している。堆積土は黒褐色土、炉は径47cmの円形の石組炉で南西部が開口している。石組炉の南西部は硬化面が形成されており火を受け橙色焼土が形成されている。複式炉の前庭部であろうか。石組炉の中から炭化材片や径5cm前後の白色粘土塊が出土している。切り合い

関係はFB56-01住、FB56-03住を切っている。

遺物は堆積土中からⅡA群、ⅢA群土器片、凹石1点が出土している。

FB56-03竪穴（第8図）

調査区北西部で確認している。南北に4.50m、東西に2.85mを測るが、住居床面まできちんと検出しておらず5～30cmの川原石が纏まって出土したためそこで調査を終了している。堆積土は炭化材片、焼土粒、微細骨片、白色粘土粒を含む黒褐色土である。竪穴廃棄後の窪地に川原石や炭化材片などを廃棄したものであろうか。切り合い関係はFB54-02住、FB56-01住に切られている。

遺物は堆積土中から石鏃2点、磨石1点、石皿1点、白色粘土塊2点（長さ40cm、8cm）などが出土している。

FB58-01竪穴住居跡（第6図）

第5トレンチ南壁土層セクションで確認している。FB58-02住の堆積土中で検出しているが、北部は攪乱を受けており規模、形状とも不明である。土層セクション部では径4.10m、壁高23～28cmを計る。堆積土は1層明黄褐色ローム粒を含む褐灰色土、2層褐灰色土と明黄褐色ロームの混土、3～4層明黄褐色ローム粒を含む褐灰色土となり、3層は壁際に堆積し竪穴壁の外まで堆積している。土層セクションを見る限り周溝があるように見えるが、FB58-02住の堆積土と区別しにくく周溝をはっきりとは検出することはできなかった。切り合い関係はFB58-02住を切り、FB58-03住に切られている。

遺物は出土していない。

FB58-02竪穴住居跡（第9図）

第5トレンチ中央部で確認している。未調査部が多く住居の規模、形状とも不明である。壁高は34～39cm、堆積土は1層黄褐色土、2層黄褐色土と明黄褐色ロームの混土、3a層炭化材を含む黒色土、3b層カーボンを含む黒褐色土、3c層橙色焼土、4層炭化材、橙色焼土を含む灰黄褐色土となり、床面付近に炭化材が分布しており焼失住居である。切り合い関係はFB58-01住、FC58-02住に切られている。

炭化材の他遺物は出土していない。

FB58-03竪穴住居跡（第6図）

第5トレンチ土層セクションで確認している。住居は北部の一部を調査しただけであり規模、形状とも不明である。土層セクション部では径2.65m、壁高44cmを測る。堆積土は1層黒褐色土、2層明黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、3層黄橙色ローム粒を含む褐灰色土、4層黄橙色ローム粒を含む黒褐色土、5～6層黒褐色土と黄橙色ロームの混土となる。3層は竪穴壁の外まで堆積している。周溝は土層セクションで壁から内側に30cm程の部分に深さ12～15cmのものを検出している。切り合い関係はFB58-01住を切りFB58-04住に切られている。

遺物は堆積土中から石鏃1点が出土している。

FB58-04竪穴住居跡（第6図）

第5トレンチ土層セクションで確認している。住居は北端部を検出したただけで大半は未調査であり、住居の規模、形状は不明である。土層セクション部では径2.70m、壁高24～28cmを測る。堆積土は1層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、2層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土となる。切り合い関係はFB58-03住、FB58-01住を切っている。

FC56-01 竪穴住居跡 (第7図)

第4トレンチで確認している。住居はトレンチ北側、南側にさらに広がるが未調査であるし、東壁は縄文時代に攪乱され盛土層が堆積しているため、住居の規模、形状とも不明である。壁高は北西壁2cmで、堆積土は焼土粒、微細骨片、土器破片を含む黒褐色土となる。炉は径55×45cmの円形の石組炉で住居西壁に寄っている。炉の中には炭化材片が分布しているが焼土は形成されていない。切り合い関係は柱234、FC56-01土坑に切られている。

遺物は出土していない。

FC56-02 竪穴住居跡 (第10図)

調査区中央部で確認している。住居は第2-②トレンチで住居南西部の一部を床面まで調査し、その他南東壁上部を検出しているが大半が未調査である。第2トレンチで確認した壁高は47cm、住居の南東辺が直線的になる砲弾形を呈する長径6m程の大型住居と思われる。堆積土は1層黒褐色土～暗褐色土、2層黒褐色土と黄褐色ロームの混土、3a層橙色焼土粒を含む黒褐色土、3b層にぶい黄褐色土と橙色焼土の混土、3c層炭化材を多く含む黒褐色土、3d層炭化材、橙色焼土粒を含む黒褐色土、3e層炭化材、ローム粒を含む黒褐色土となる。床面より炭化材が出土しており焼失住居である。本住居に伴う柱穴は1個(P1)検出しているが深さ17cmと浅い。切り合い関係はFC56-03住、柱9、12、92、94、231に切られている。

遺物は出土していない。

FC56-03 竪穴住居跡 (第10図)

第2-②トレンチ西壁土層セクションで確認された住居でFC56-02住の堆積土中に築かれている。壁高は52cm、未調査部が多く規模・形状は不明。堆積土は1層黒褐色～褐色土、2層暗褐色土となり、2層は壁際に堆積している。切り合い関係はFC56-02住を切っている。

遺物は出土していない。

FC58-01 竪穴住居跡 (第9図)

第5トレンチで住居北部を調査している。住居はトレンチ北側、南側にさらに広がるが未調査であり竪穴の規模・形状とも不明である。第5トレンチ南壁で径4.35mを測り、堆積土は1層黒褐色土、2層焼土粒を含む黒褐色土、3層～4層黒褐色土となり、3層は住居の壁の外まで堆積している。炉は北から南に長さ112cm、幅70cmの石組炉を検出している。炉の中に焼土は形成されていない。切り合い関係はFC58-02住、FC60-01住居跡を切っている。

遺物は床面からV群土器(第40図29、33)が出土している。

FC58-02 竪穴住居跡 (第9図)

第5トレンチ土層セクションで確認している。住居はトレンチ北側、南側にさらに広がるが未調査であるし、東側はFC58-01住に切られ、住居の規模、形状とも不明である。壁は第5トレンチ北壁で17cm、南壁で27cmを測る。堆積土は1層焼土粒、微細骨片を含む黒褐色土、2層暗褐色土、3層黒褐色土となる。切り合い関係はFB58-02住を切り、FC58-01住に切られている。

遺物は出土していない。

FC60-01 竪穴住居跡 (第9図)

第5トレンチ土層セクションで確認している。住居はトレンチ北側、南側にさらに広がるが未調査であるし、

極一部しか床面まで調査しておらず住居の規模、形状とも不明である。堆積土は浮石を含む黒色土。切り合い関係はFD60-01住を切り、FC58-01住に切られている。

遺物は堆積土中からⅡA群土器片が出土している。

FD54-01 竪穴住居跡 (第10図)

第2-②トレンチで住居北東部を確認している。未調査部が多く規模、形状は不明である。壁高は33～43cmを測る。堆積土は1 a～1 d層黒褐色土、2 a～2 c層黒褐色土と明黄褐色ロームの混土、3層黒褐色土、4 a～4 d層黒褐色土と淡黄色シルト、明黄褐色ロームの混土となる。切り合い関係は柱96などの柱穴に切られている。

遺物は堆積土中より磨石1点が出土している。

FD60-01 竪穴住居跡 (第9図)

第5トレンチ東端、第3トレンチ北部で住居床面と南壁の一部を確認している。東半は調査区外に広がり未調査部分も多いが、南北4m強の竪穴と思われる。壁高は南壁15cmを測り、堆積土は1層浮石を含む黒褐色土、2層浮石を含む黒褐色土と黄褐色土の混土となる。本竪穴の床面下にFD60-02住を確認している。切り合い関係はFD60-02住を切り、FD60-01土坑に切られている。

遺物は出土していないが、Ⅱ期の竪穴(FC60-01住)に切られていること、堆積土などからⅡ期の竪穴と思われる。

FD60-02 竪穴住居跡 (第9図)

第5トレンチ東部で確認している。FD60-01住床面下にあり、住居東部の一部を調査している。壁高は7～12cmを測り、堆積土は浮石を含む黒褐色土と黄褐色土の混土となる。切り合い関係はFD60-01住に切られている。

遺物は出土していないがⅡ期の竪穴(FC60-01住、FD60-01住)に切られていること、堆積土などからⅡ期の竪穴と思われる。

FE54-01 竪穴住居跡 (第7図)

第2-①トレンチで確認している。住居はトレンチ部分しか調査しておらず、規模、形状とも不明である。壁高は60cmを測る。堆積土は1～14層の黒褐色土～暗褐色土と16層暗褐色土とははっきりと分けることができる。1層上面には配石遺構があり、1～14層は配石に伴う墓坑群堆積土の可能性が考えられる。床面は硬化しており床面下にFE56-02土坑がある。切り合い関係はFE56-01～02土坑を切っている。

遺物は床面から内面にアスファルトが付着したⅥ群土器の深鉢片(第41図42)、Ⅲ群土器片が出土している。

(2) 土坑・陥穴

調査区南部土坑群

調査区南部では配石遺構に伴う石を除去し、小判形の土坑群の平面プラン(第5図・カラーグラビア)を確認している。その後数cm毎レベルを下げ5～6回平面プランを実測したがさほどプランは変化しなかった。30cm近くレベルを下げた時点でこれらの土坑群のプランは消えはじめ、竪穴住居跡や大型の土坑の平面プランが見えてきた(第4図)。これら小判形の土坑群は配石に伴う墓坑群の可能性が高いように思われるが、覆土は非常に類似しており1基ずつ掘り下げ調査することは全くできなかった。また、墓坑群と考えられる堆積土には土器片などの遺物はほとんど含まれていなかった。

FB54-01土坑（第7図）

第4トレンチで確認している。土坑の南部は未調査である。南東から北西に0.75m、深さ32cmを測り、隅丸方形の土坑と思われる。堆積土は1層黒褐色土、2層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、3層黒褐色土と明黄褐色ロームの混土、4層黒褐色土と黄褐色ロームの混土となる。切り合い関係はFB54-02土坑を切っている。

遺物は堆積土中より石鏃3点が出土している。

FB54-02土坑（第7図）

第4トレンチ西端で確認している。土坑南半はFB54-01土坑に切られており全体の形状は不明である。深さ36cmを測り、堆積土は浮石を含む黒褐色土と褐色土の混土となる。

遺物は出土していないが、堆積土よりⅢ期の土坑と思われる。

FB58-01土坑（第7図）

調査区北部で確認している。開口部径0.65m、深さ22cmの円形の土坑である。堆積土は1層浮石を含む黒褐色土、2層浮石を含む黒褐色土と褐色土の混土、3層黒褐色土と褐色土の混土、4層浮石を含む褐色土、5層褐色土となる。切り合い関係はFB58-02土坑を切り、FA56-01住に切られている。

遺物は出土していないが、堆積土よりⅢ期の土坑と思われる。

FB58-02土坑（第7図）

調査区北部で確認している。開口部径0.80m、深さ19cmの円形の土坑である。堆積土は1層浮石を含む黒褐色土、2～3層浮石を含む黒褐色土となる。切り合い関係はFB58-01土坑、FA56-01住に切られている。

遺物は出土していないが、堆積土よりⅢ期の土坑と思われる。

FD56-01土坑（第11図）

調査区南部で確認している。未調査部が多く全体の形状は不明だが平面プランより開口部径1.40m程の円形の土坑と思われる。深さ31cmを測り、堆積土は浮石を多量に含む黒褐色土となる。

遺物は出土していないが堆積土よりⅢ期の土坑と思われる。

FD56-03土坑（第11図）

調査区南部で確認している。開口部径0.82×1.44m、底径0.90×1.24m、深さ92cmの円形のフラスコ土坑で、堆積土は1 a～1 f層浮石を含む黒褐色土、2 a～2 d層黒褐色土、3 a～3 b層褐色土、4層黒色土、5 a～5 b層浮石を含む黒褐色土、6～7層浮石を含む褐色土となる。

遺物は堆積土中よりⅢB群土器片、石鏃2点、凹石1点、磨石3点、石皿1点が出土している。

FD56-06土坑（第11図）

調査区南部で確認している。未調査部が多く全体の形状は不明である。開口部径1.15m、深さ15cmを測り、堆積土は1層黒色土、2層黒褐色土となる。

遺物は出土していない。

FD60-01土坑（第9図）

第3トレンチで確認している。開口部径1.04m、深さ15cmの円形の土坑である。堆積土は1～2層黒褐色土、3 a層黒褐色土、3 b層黒褐色土、4層浮石を含む黒褐色土となる。切り合い関係はFD60-01住を切っている。

遺物は出土していないが、堆積土よりⅢ期の土坑と思われる。

FD60-03土坑（第11図）

調査区東部で確認している。開口部径0.84×（1.00）m、深さ33cmの楕円形の土坑である。堆積土は1～3層灰黄褐色土と明黄褐色ロームの混土、4～7層黒褐色土と灰黄褐色土の混土となる。底部は凹凸が激しい。

遺物は出土していない。

FE54-01土坑（第10図）

第2-③トレンチで土坑南東部を調査している。開口部径1.78m、深さ88cmの大型の土坑と思われるが、風倒木の可能性もある。堆積土は1 a～1 b層黒褐色～褐色土、2 a～2 m層浮石を多量に含む黒～褐色土、3 a～3 d層褐色土、4層黄褐色ロームとなる。切り合い関係はFE54-02土坑を切っている。

遺物は出土していない。

FE54-02土坑（第10図）

第2-③トレンチで確認している。大半をFE54-01土坑に切られている。深さ37cmを測るフラスコ土坑で、堆積土は浮石を多量に含む黒褐色土となる。

遺物は出土していないが、堆積土や切り合い関係よりⅢ期の土坑と思われる。

FE56-01土坑（第7図）

第2-①トレンチで確認している。土坑北部の一部のみ残存しており大半はFE54-01住に切られている。深さ60cmを測り大型のフラスコ土坑と思われる。堆積土は浮石を含む黒色土と黒褐色土と褐色土の混土となる。

遺物は出土していないが、切り合い関係や堆積土などからⅢ期の土坑と思われる。

FE56-02土坑（第4図）

第2-①トレンチFE54-01住床面で床面下に当土坑があることを確認しているが、未調査であり規模、形状とも不明である。切り合い関係はFE54-01住に切られている。堆積土はFE56-01土坑と類似する。

遺物は出土していないが、切り合い関係や堆積土などからⅢ期の土坑と思われる。

FC56-01陥穴（第11図）

第4トレンチで確認している。長さ3.50m、幅0.60mの長楕円形で、深さ1.36m、底部は15cmと締まる。堆積土は1、4層黒色土、2、7層黒褐色土と黒色土の混土、5層黒褐色土、6、8層褐色土とにぶい黄橙色ロームの混土となる。

遺物は出土していないが堆積土に含まれる黒色土は後期の遺構に入るものと類似しているように思える。

（3）掘立柱建物跡・柱穴群（第3図）

掘立柱建物跡は調査区南東部で2棟検出している。柱穴は250個検出し内203個掘り下げ調査しているが、掘立柱建物跡を検出した調査区南東部とⅡb区FB52掘立柱建物跡に隣接する調査区西部に集中している。柱穴の確認面からの深さは30cm以下のもの90個（44.3%）、31～60cmのもの76個（37.4%）、61～90cmのもの31個（15.3%）、90cmを越えるもの6個（3.0%）となり、浅いものほど比率が高くなり、掘立柱建物に伴うような深い柱穴はさほど多くない。

柱92（堀方径60cm、深さ124cm）、柱12（堀方径52cm、深さ152cm、150cm）以上の2個が群を抜いて大

規模なものであるが、いずれも柱穴の密集する区域から外れた調査区中央部で検出しており、底部のプランや土層セクションの観察から2～3回建て替えられていることが明らかになっている。また、柱92では径35cmを測る柱痕を検出している。

遺物は柱125柱痕からV群土器片が出土している。

FD58-1掘立柱建物跡（第11図）

調査区南東部に位置する。東西に1間、南北に2間の6本柱の建物で、東西の柱間は2.15m（柱164～107）、2.20m（柱147～140）、2.13m（柱101～157）、南北は2.12m（柱164～147）、1.60m（柱147～101）、1.66m（柱107～140）、1.98m（柱140～157）で、各柱穴の堀方の規模は柱164-径36×44cm・深さ68cm、柱147-径38×44cm・深さ82cm、柱101-径48×50cm・深さ76cm、柱107-38×40cm・深さ92cm、柱140-径32×38cm・深さ82cm、柱157-径43×52cm・深さ62cmとなっている。柱痕は土層セクションで柱101（径28cm）、柱107（径26cm）で確認している。

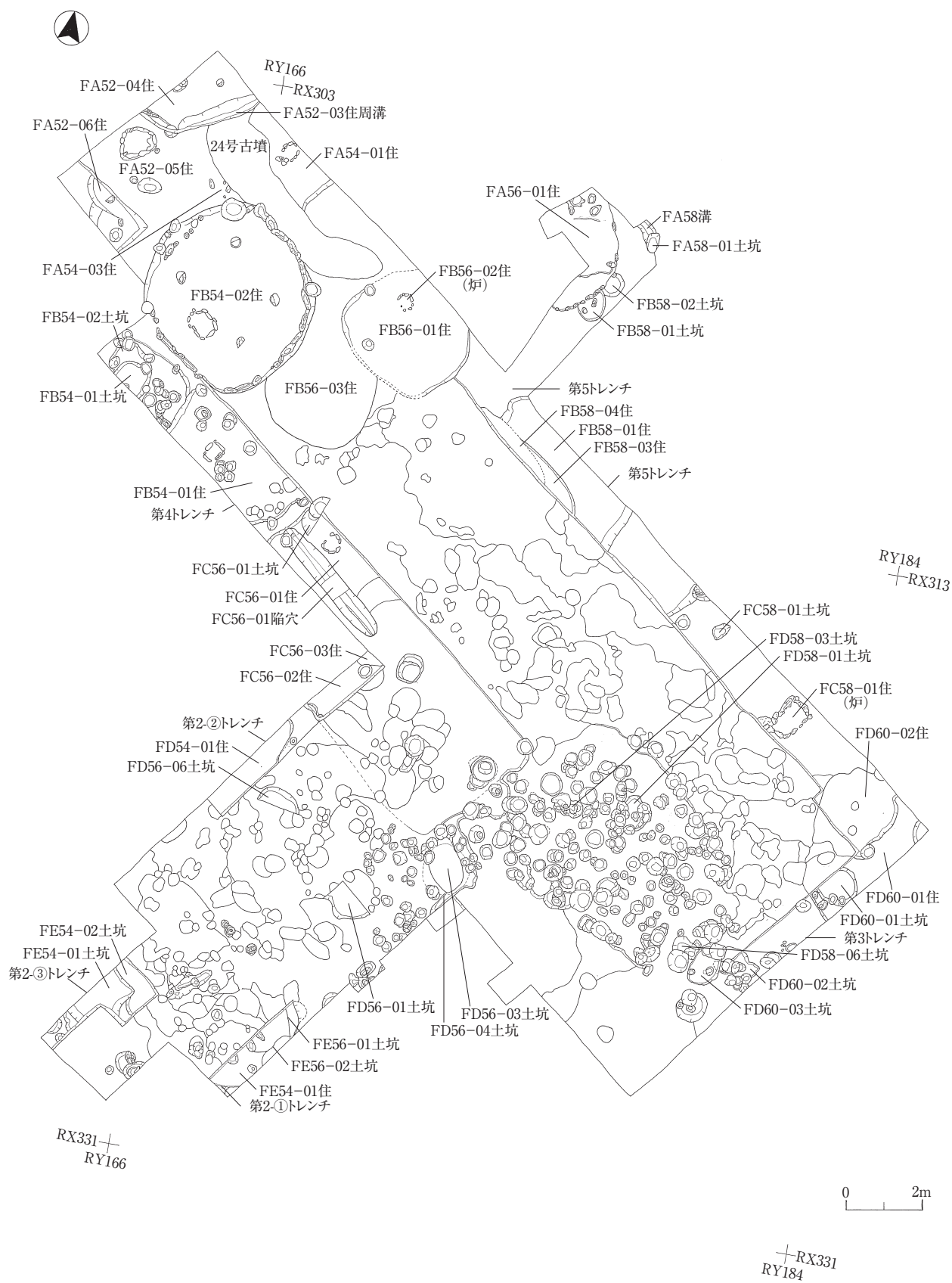
FD58-2掘立柱建物跡（第11図）

調査区南東部に位置する。東西に1間、南北に2間の6本柱の建物で、東西の柱間は1.90m（柱113～167）、2.10m（柱153～123）、2.10m（柱161～169）、南北は1.75m（柱113～153）、2.20m（柱153～161）、1.65m（柱167～123）、2.20m（柱123～169）で、各柱穴の堀方の規模は柱113-径38×38cm・深さ62cm、柱153-径32×34cm・深さ78cm、柱161-径43×52cm・深さ64cm、柱167-44×45cm・深さ44cm、柱123-径40×42cm・深さ54cm、柱169-径45×52cm・深さ64cmとなっている。柱痕は土層セクションで柱153、167で確認している。また、柱123は土層セクションと底面の観察から柱を建て替えていることが明らかになっている。

（4）盛土（第5・6・9図）

調査区東部で検出している。微細骨片や焼土粒・土器片を多量に包含する褐色土層（カラーグラビア）である。確認面で掘立柱建物跡に伴う柱穴群を検出しており、Ⅱ期（FC60-01・02住居跡）～Ⅴ期（FC58-01住居跡）の竪穴などの遺構覆土を掘り込んで堆積している。底部は凹凸が激しく、盛土層中で現地性と思われる焼土が所々検出されている。

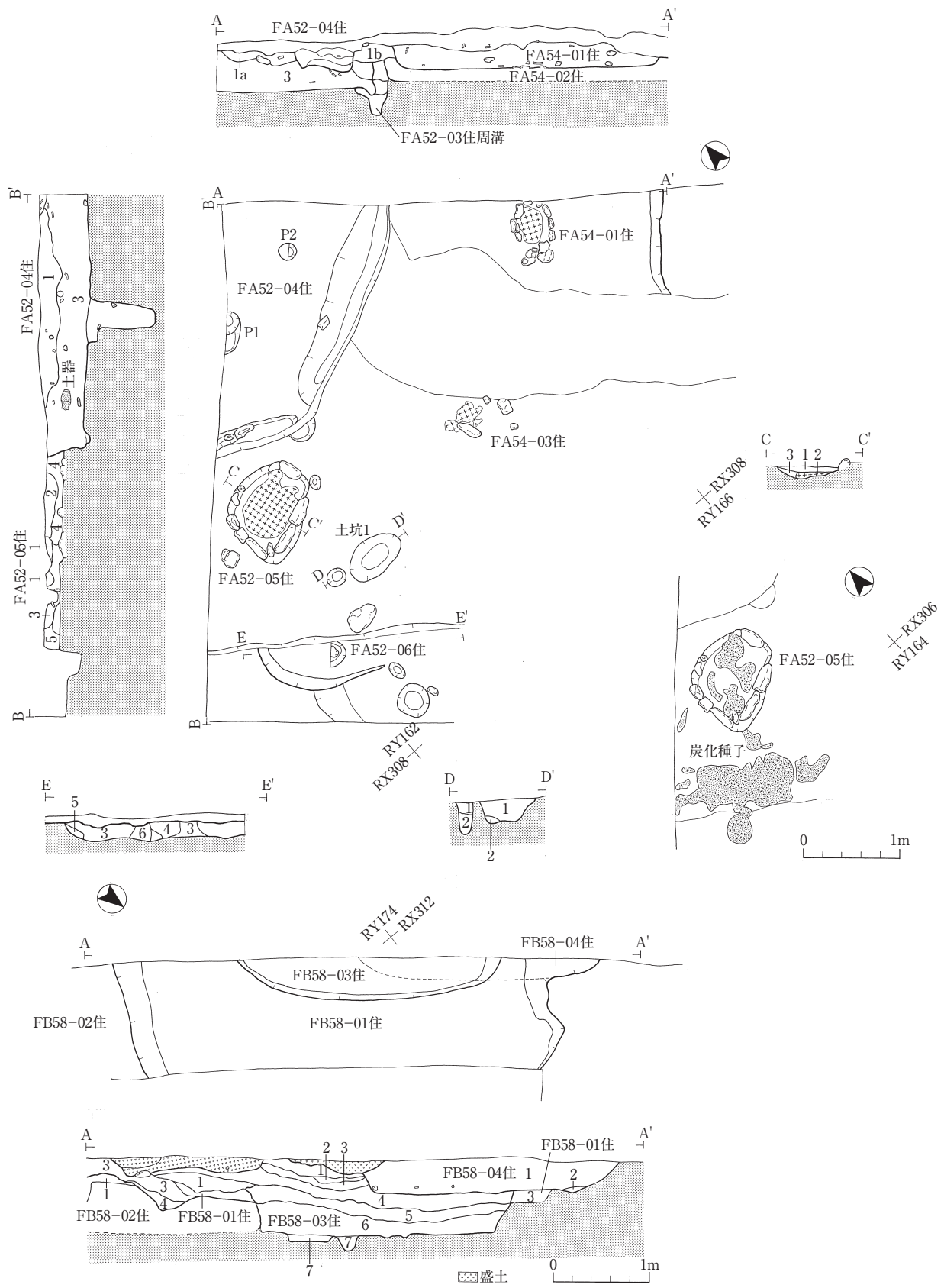
出土する遺物は細かく土器片は3cm以下の小さなものばかりであること、Ⅱ群からⅤ群土器片がごちゃごちゃに混じって出土すること、平面プランが細かく分層できることなどから繰り返し細かい単位で掘り返されていたことが分かる。



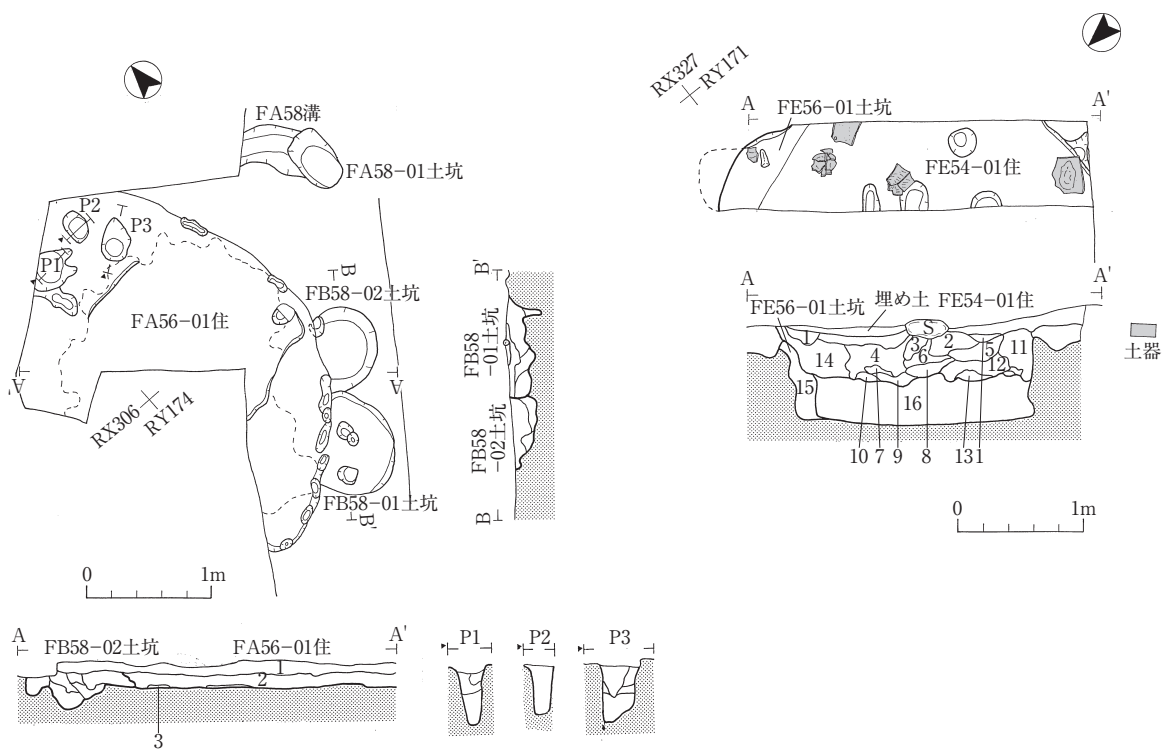
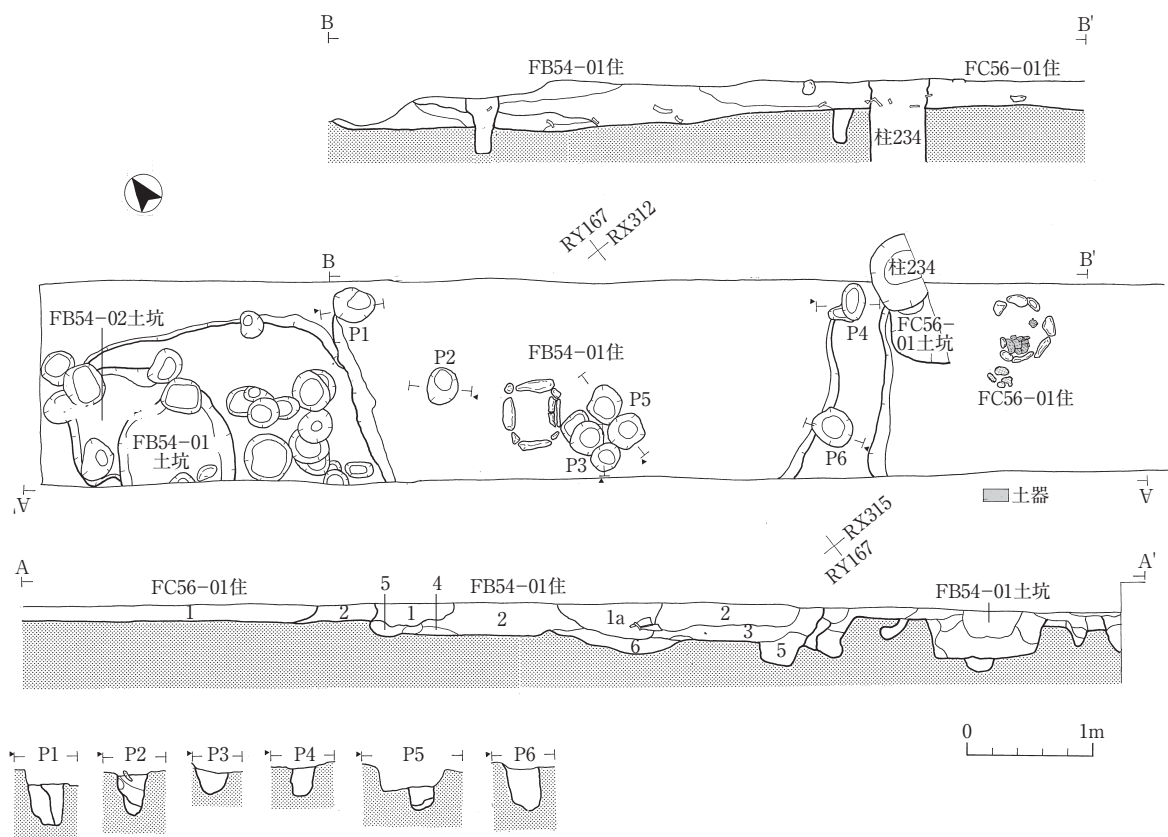
第4図 II a区全体図



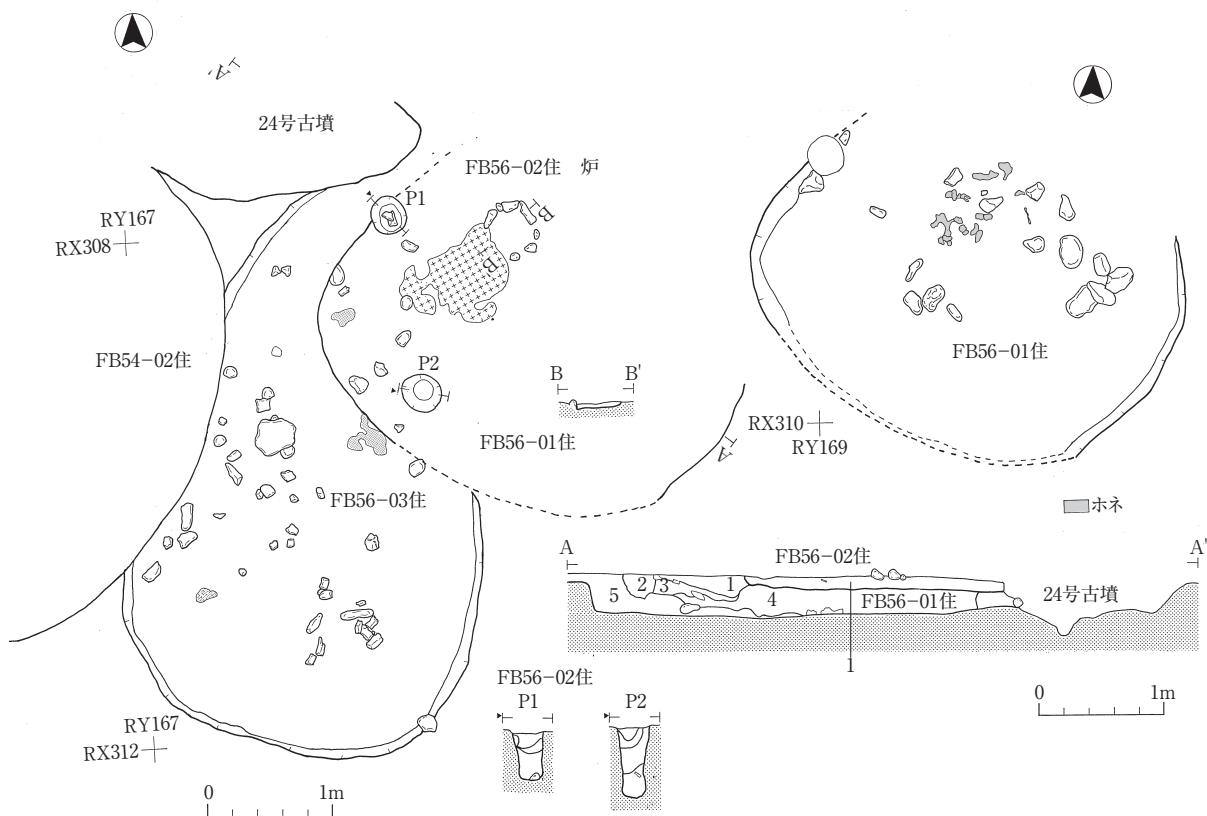
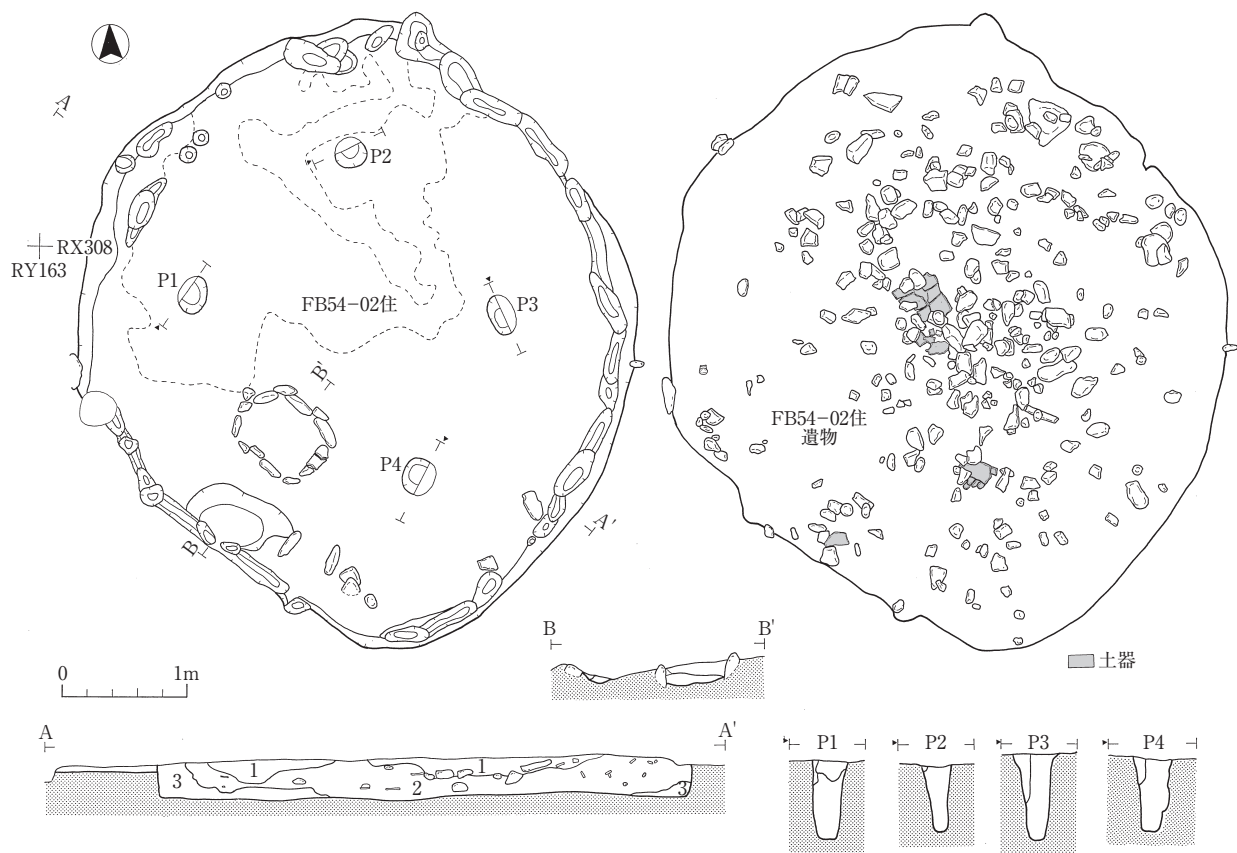
第5図 II a区検出遺構 (1)



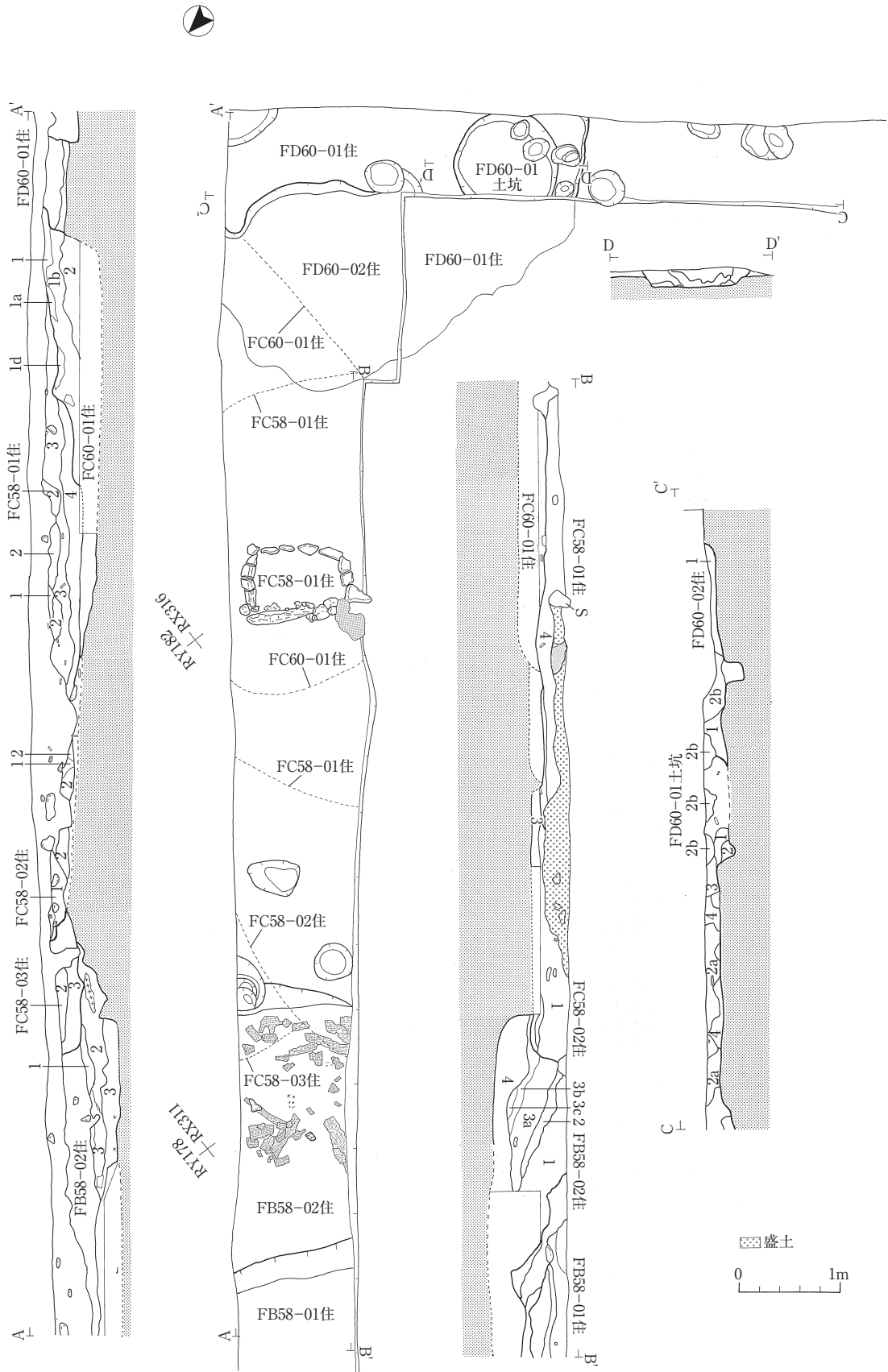
第6図 II a区検出遺構 (2)



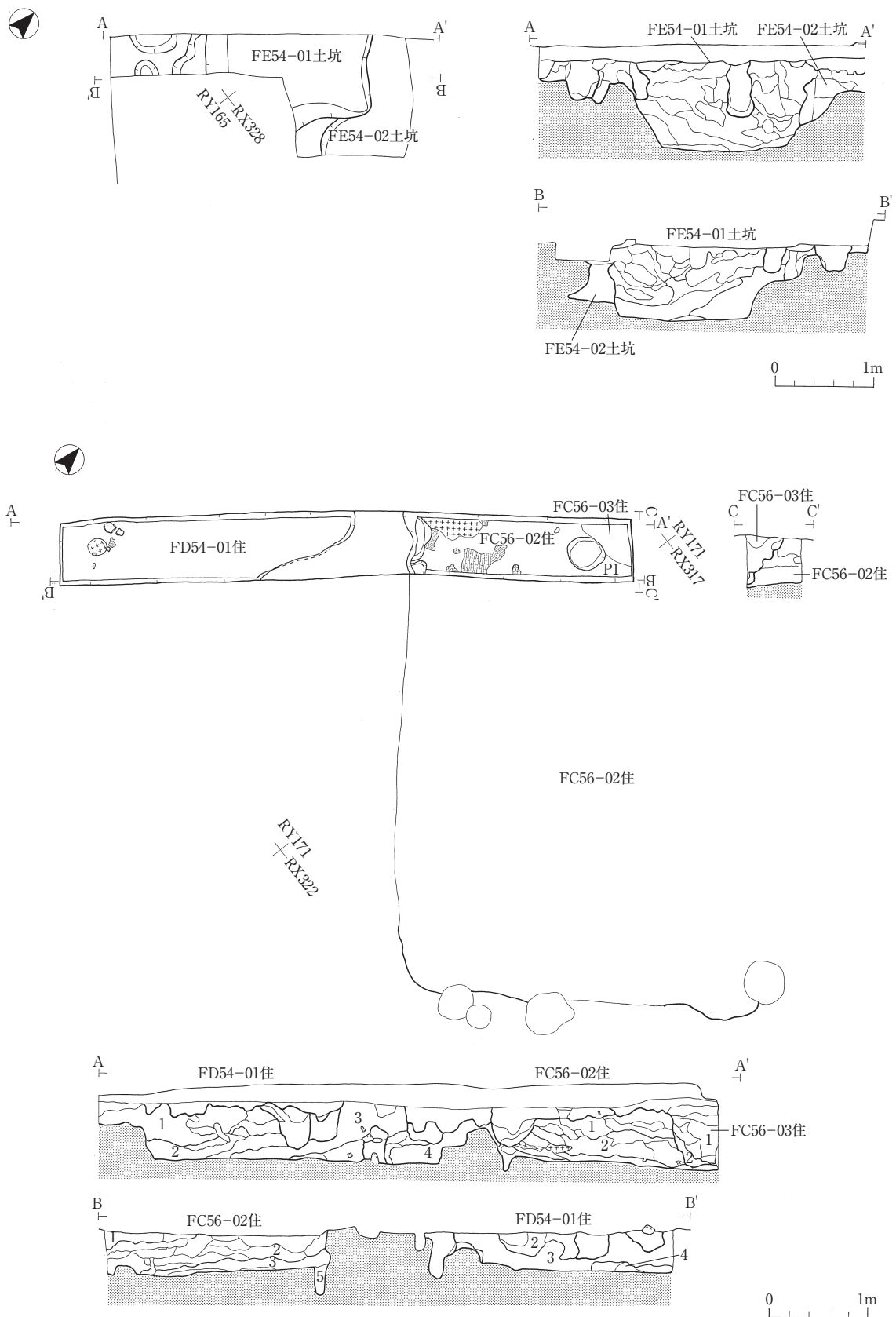
第7図 II a区検出遺構 (3)



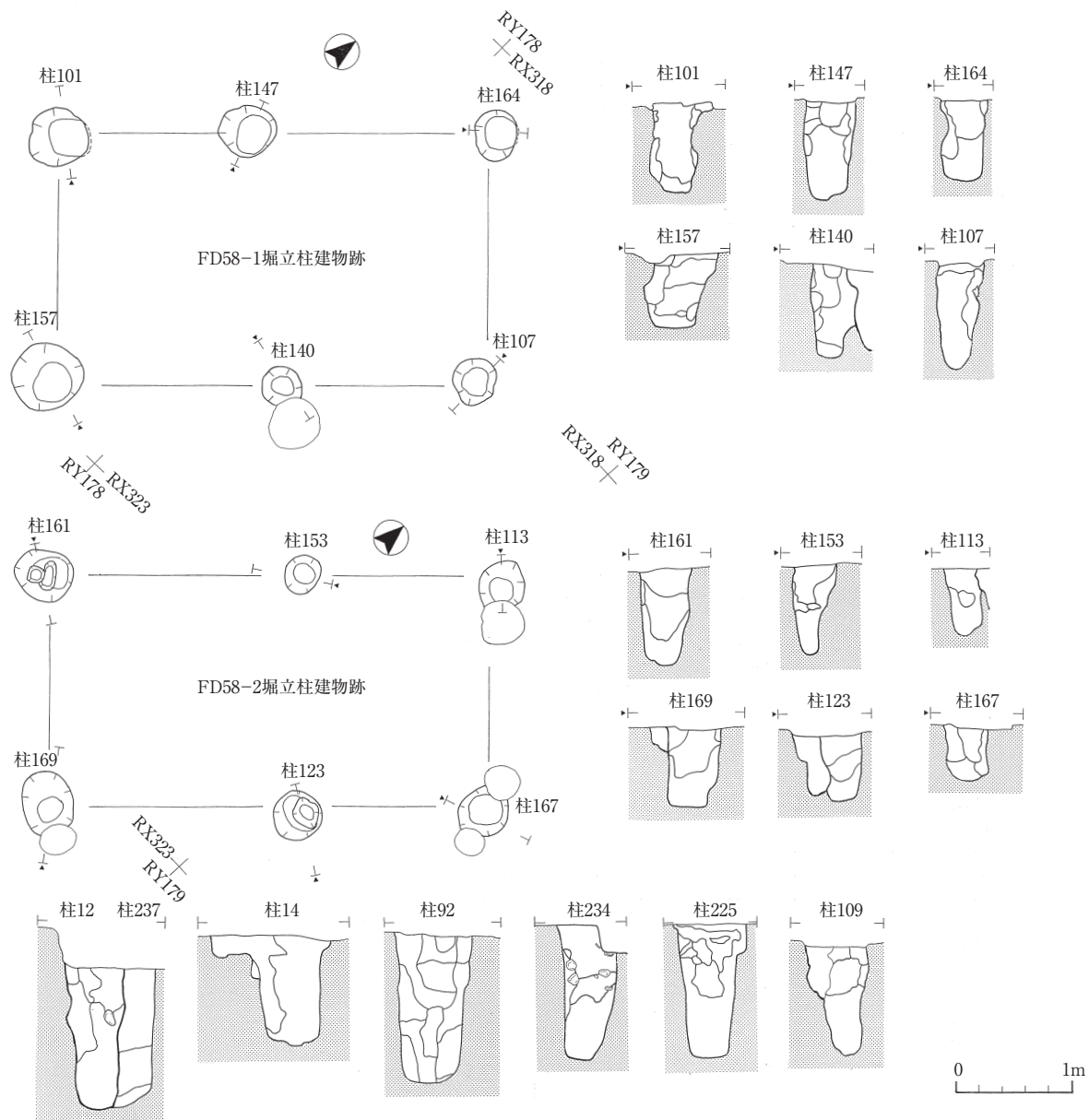
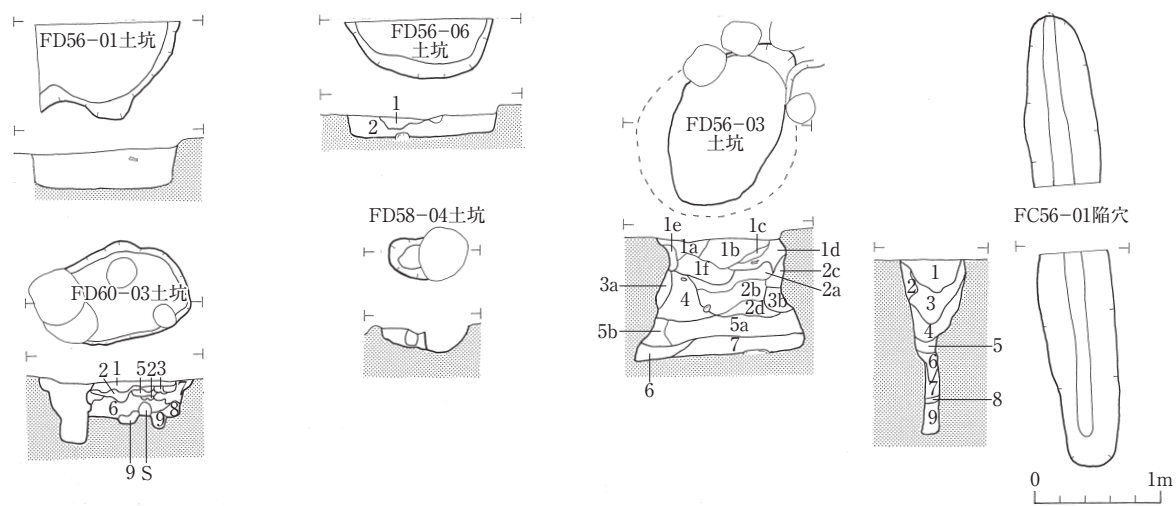
第8図 II a区検出遺構 (4)



第9図 II a区検出遺構 (5)



第10図 II a区検出遺構 (6)



第11图 II a区検出遺構 (7)

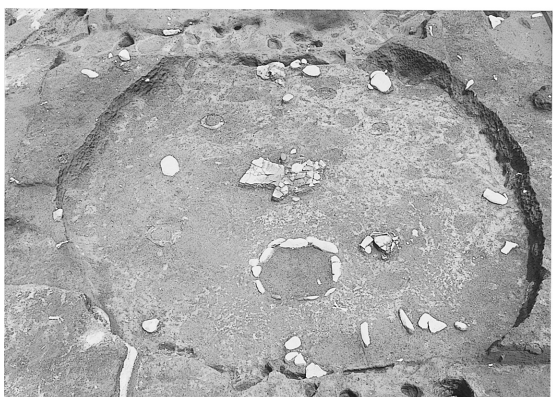
PL 1 II a調査区(1)



全景（東より）



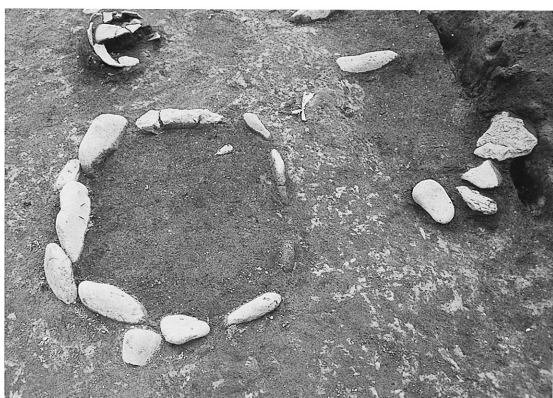
調査区西部（北東より）



FB54-02住居跡



FB54-02住居跡土器出土状況



FB54-02住居跡炉



FA52-03・04住居跡



FB56-03住居跡



FB56-01住居跡

PL 2 II a調査区(2)



FB56-01住居跡骨出土状況



FB56-02住居跡



FC56-01住居跡



FA52-05住居跡



FC58-01住居跡



FB58-02住居跡土層セクション



FD56-03土坑



FD56-03土坑土層セクション

PL 3 II a調査区(3)



柱234・FC56-01土坑セクション



柱234・FC56-01土坑 獣骨・土器片出土状況



FD60-01土坑



FC56-01陥穴



盛土検出状況(東より)



盛土土層セクション



土坑群平面プラン(南西より)

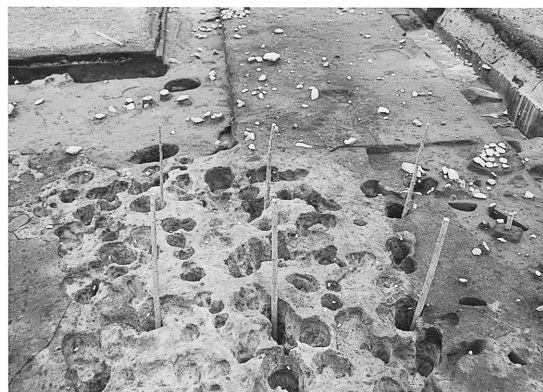


柱穴群平面プラン(東より)

PL 4 II a調査区(4)



柱穴群 (東より)



FD58-01掘立柱建物跡 (東より)



FD58-02掘立柱建物跡 (東より)



FD58-02掘立柱建物跡 (南より)



柱穴群 (東より)



アスファルト塊出土状況



作業風景



作業風景

2. II b区 (第24～34図)

II b 調査区は配石遺構群 (配石遺構西側ブロック) の西側に位置し、調査面積は約401㎡、全域がほぼ平坦である。

平成4年度に行われた調査区東部の調査では配石遺構の石の抜き取り痕と思われる遺構群 (FE52遺構、FF54遺構、FG56遺構)、大型フラスコ土坑 (FF50-01、FG48-01土坑)、墓坑と思われる土坑群 (FE54-01土坑は1号墓壙、FE52-02土坑は2号墓壙、FE52-03土坑は3号墓壙、FF52-07土坑は4号墓壙、FF52-06土坑は6号墓壙、FE52-04土坑は7号墓壙とし『御所野I』で報告している) が検出されている (第12図)。

平成11年度以後は遺構復原のための配石遺構に伴う掘立柱建物跡の調査を目的に発掘調査を行った。しかし、堅穴や土坑が密集して検出されており、掘立に伴う柱穴の堆積土と堅穴や土坑の堆積土が非常に類似しており検出が非常に困難であったため、堅穴の一部を掘り下げ柱穴群を検出し、掘立6棟、柱列2列などを検出した。調査区全域で検出した遺構数は堅穴21棟、土坑約90基、柱穴636個に及ぶ。

ここでは平成11年度以後調査した掘立、柱列、堅穴、土坑について報告するが、堅穴や土坑については上述のとおり掘立の調査が目的であったため、全く掘り下げずに保存したもの、床面まで調査した堅穴でも伴う柱穴を調査しなかったものも多い。

(1) 堅穴住居跡

FA50-01堅穴住居跡 (第13図)

調査区北端で堅穴南西部の平面プランを確認しているが掘り下げずに保存している。大半が調査区外に広がっており、住居の規模、形状とも不明であるが、長径10mを超える大型住居と思われる。堆積土は炭化材を多く含む黒褐色土で保存状況が良好な焼失住居と思われる。切り合い関係はFA52-01住を切りFB50-01土坑に切られている。

遺物は遺構確認面でIV群土器片 (第46図137)、小型ミニチュア土器1点、石鏃6点、石匙1点、削器1点、凹石2点、磨石8点、磨製石斧2点、石皿1点、有孔土製品2点、盤状土製品1点が出土している。

FA52-01堅穴住居跡 (第13図)

調査区北端で堅穴の南部を確認している。西側はFA50-01住に切られ、北側は調査区外に広がっているため住居の規模・形状とも不明である。壁高10cm、堆積土は1、6層浮石を含む黒褐色土、2層褐色土、浮石を含む暗褐色土、3層黄褐色ロームを含む黒褐色土、4層黒褐色土、5層黄褐色ロームを含む暗褐色土となる。切り合い関係はFB52-01土坑を切り、FA50-01住、FA52-02住に切られている。

遺物は堆積土中からVI群土器片 (第50図222)、石鏃1点、凹石1点が出土している。

FA52-02堅穴住居跡 (第13図)

調査区北端で確認している。貼床 (硬化面) の一部を検出しただけであり、しかもその範囲が調査区外に広がっているため、規模・形状とも不明である。切り合い関係はFB52-01土坑を切り、FB52-01住、FB52-01土坑に切られている。

遺物は堆積土中からVI群土器片 (第50図222)、石鏃1点、凹石1点が出土している。

FB48-01堅穴住居跡 (第14図)

調査区北西部で確認している。大半は調査区外に広がっており、住居の規模、形状とも不明である。壁高

は54cm、堆積土は1 a層浮石を含む黒褐色土、1 b層にぶい黄褐色ロームを含む暗褐色土、2層暗褐色土と褐色土の混土、3 a～3 b層浮石を含む黒褐色土、4層明黄褐色ロームとにぶい黄橙色ロームと黒褐色土の混土、5 a層褐色土、5 b層暗褐色土と黒褐色土の混土、5 c～5 e層暗褐色土、6層浮石を含む黒褐色土と黒色土の混土となる。周溝は部分的に深さ20cm程のものが巡っている。切り合い関係はFC48-01住を切っている。

遺物は堆積土中からⅢB群土器片（第44図91）、石鏃4点が出土している。

FB52-01 竪穴住居跡（第13図）

調査区北東端で炉を確認している。南側はFB52-02住に切られ、北～東側は調査区外に広がっており、住居の規模、形状とも不明である。堆積土は1層黒色土、2～4層黒褐色土、5層焼土粒を含む黒褐色土となる。炉は径58cm程の焼土面の周りに長さ20cm程の石を配したものであるが東半が調査区外に広がっており全体の形状は不明である。炉の中は床面より4cm程掘られている。切り合い関係はFA52-02住に切られている。

遺物は出土していない。

FB52-02 竪穴住居跡（第13図）

調査区北部で確認している。南側はFB52-03住に切られ、東側は調査区外に広がっており、住居の規模、形状とも不明である。壁高は10cm、堆積土は1～3、5層黒褐色土、4、6層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、7～8層暗褐色土を含む黒褐色土となる。炉は58×65cmの方形の石組炉を検出しているが一部調査区外に広がっている。炉の中は床面より4cm程掘られており、中に焼土層が形成されている。

切り合い関係はFB52-01住を切り、FB52-03住に切られている。

遺物は堆積土中から磨石1点、石皿1点、棒状土製品1点が出土している。

FB52-03 竪穴住居跡（第13図）

調査区北部で確認している。東西5.10mの楕円形の住居で、壁高は27cm、堆積土は黄褐色ローム粒、浮石を含む黒褐色土となる。周溝は幅12cm、深さ10cm程のものが北から西の壁際に巡っており、床面北部と西部からⅢB群土器を使った埋設炉が検出されている。切り合い関係はFB52-02住を切り、FB52-04住に切られている。

遺物は堆積土中からミニチュア土器3点、石鏃3点、削器1点、石錐1点、凹石6点、磨石4点、磨製石斧1点、石皿4点、台石1点、石棒1点、盤状土製品3点が出土している。

FB52-04 竪穴住居跡（第13図）

調査区北部で確認している。南北約5.00m、東西3.78mの楕円形の住居跡で、壁高は27cm、堆積土は1～3層浮石を含む黒褐色土、4～5層焼土粒、炭化材片を含む暗褐色土、6～10層炭化材を含む黒褐色土、11層褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土となる。床上には炭化材が分布しており焼失住居である。炉は南壁から南北方向に長さ70cm、深さ8cmの掘り込みと、93×74cmの長方形の石組炉からなる複式炉で、石組炉の中には焼土が形成されておらず、前庭部の東西辺に川原石が配されている。柱穴は2個検出しているが深さ11cm、21cmといずれも浅いものである。切り合い関係はFB52-03住を切っている。

遺物は堆積土中からⅥ群土器（第41図49）、石鏃2点が出土している。

FC48-01 竪穴住居跡（第14図）

調査区北西部で確認している。南北4.00m、東西3.64mの隅丸方形の住居跡で、壁高は東壁76cm、西壁90cm、南壁17cm、北壁43cmを測り、堆積土は1 a～1 b、2 a～2 c層浮石を含む黒褐色土、3 a～3 e層浮石を含む黒褐色土と褐色土、黄褐色ロームの混土、4 a～4 b層暗褐色土と褐色土の混土、5 a～5 b層硬くしまった暗褐色土となる。炉は住居中央部から埋設炉が検出されている。埋設炉内には炭化材や焼土が分布している。周溝は住居西壁で深さ10cm程のものが巡っており、柱穴は西壁沿いで主柱穴と考えられるP 1（深さ62cm）、P 2（深さ66cm）の2個検出しているが未検出の主柱穴もあるものと思われる。また、南壁中央部からは44×55cm、深さ30cm、北壁中央部からは44×44cm、深さ47cmの掘り込み施設を検出している。切り合い関係はFC48-02土坑、FB48-01住に切られている。

遺物は埋設炉体土器（第37図2）の他、堆積土中からⅡA群土器（第42図52～53）、石鏃1点、三角形土製品1点、盤状土製品1点が出土している。

FC50-01 竪穴住居跡（第12、15図）

調査区中央部で西半部の平面プランを確認し、Cトレンチで床面まで竪穴の一部を調査している。南北5.40mを測るが、未調査部が多く住居の形状は不明である。壁高は37cm、堆積土は1 a～1 c、2層浮石を含む黒褐色～暗褐色土、3層浮石、褐色土を含む暗褐色土、4層浮石を含む黒褐色土、5層にぶい黄褐色ローム、6～7層黒褐色土と黄褐色ロームの混土、8 a～8 b層暗褐色土、9層橙色焼土粒、炭化材、黄褐色ロームを含む黒褐色土、10層炭化材、黄褐色ロームを含む黒褐色土となる。床面には炭化材や橙色焼土が分布しており焼失住居である。切り合い関係はFD50-01住を切り、FC50-02住に切られている。

遺物は堆積土中から石鏃1点、敲石2点、石皿1点、盤状土製品1点が出土している。

FC50-02 竪穴住居跡（第15図）

調査区中央部で炉と貼床、南壁の一部を確認している。南北3.62mを測る円形～楕円形の住居と思われる。壁高は南壁18cm、堆積土は1～4層微細骨片や土器片を含む黒褐色土となる。炉は南壁から北西に58×92cm、深さ13cmの掘り込みと、87×97cmの石組炉からなる複式炉である。石組炉は方形を呈し南東辺には長さ38cmの大きな石が配され、他は5～25cmの小さな石が2重に組まれており、炉の中に焼土層は形成されていない。貼床は住居のほぼ全面に行われている。

遺物は床面からⅢB群土器（第37図3、44図99、45図116）、Ⅵ群土器（第40図37）が、堆積土中からⅢB群土器片、石鏃8点、磨石4点、磨製石斧1点、石皿5点が出土している。

FD48-01 竪穴住居跡（第16図）

調査区西部で確認している。4.80×6.10mの楕円形の住居跡と思われる。壁高は北壁35cm、堆積土は1～2 b層浮石を含む黒褐色土、3 a～3 b層暗褐色土、4層暗褐色土と黒褐色土の混土、5 a層にぶい黄褐色ローム、5 b～5 c層褐色土を含むにぶい黄褐色ローム、5 d層暗褐色土と黄褐色ロームの混土となる。炉は南東壁から北西に130cm、深さ12cmの掘り込みと径69×82cmの石組炉からなる複式炉で、石組炉の中に橙色焼土が形成されている。石組炉はコの字形を呈しているが南西の石は抜かれたのかもしれない。周溝は深さ5cm程のものが巡っており、南側の周溝はFD48-03住に切られ一部しか残っていない。柱穴はP 1（深さ56cm）、P 2（深さ25cm）、P 3（深さ54cm）の3個検出しているが、その規模からP 1、P 3が主柱穴と思われる。切り合い関係はFD48-02住を切り、FB48-03住に切られている。

遺物は床面からⅢB群土器（第43図82、43図84）、Ⅳ群土器（第38図14）、Ⅵ群土器（第41図46、48）、堆

積土中からⅣ群、Ⅴ群土器片、石鏃20点、石匙1点、搔器1点、石錐2点、凹石7点、敲石1点、磨石4点、石皿6点、石棒3点、三角形土製品1点、盤状土製品5点が出土している。

FD48-02 竪穴住居跡 (第16図)

調査区西部で確認している。FD48-01住に大半を切られ住居の規模・形状とも不明である。壁高は北壁10cm、堆積土は黒褐色土、切り合い関係はFD48-01住に切られている。

遺物は出土していない。

FD48-03 竪穴住居跡 (第16図)

調査区西部で確認している。竪穴の南部は調査区外に広がっている。東西径6.00mを測る楕円形の住居で、壁高は西壁30cm、北壁11cm、東壁48cm、堆積土は1、2 a～2 b層浮石を含む黒褐色土、3 a～3 b層浮石を含む暗褐色土、4層浮石を含む黒褐色土と暗褐色土の混土、5 a～5 b層にぶい黄褐色ローム、5 c層褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土、5 d層暗褐色土と黄褐色ロームの混土となる。炉は南東から北西に158cm、深さ16cmの掘り込みと径68×78cmの方形の石組炉からなる複式炉である。周溝は深さ5cm程の浅いものが巡っており、部分的に途切れている。柱穴はP 1 (深さ52cm)、P 2 (深さ45cm)、P 3 (深さ44cm)、P 4 (深さ44cm) の4個検出しているが、FD48-01住の柱穴も含まれているかもしれない。切り合い関係はFD48-01住、FC46-01土坑を切っている。

遺物は堆積土中から盤状土製品2点が出土している。

FD50-01 竪穴住居跡 (第12図)

調査区中央部で南西壁の平面プランを確認し、Cトレンチで床面まで竪穴の一部を調査しているが、大方未調査で住居の規模・形状とも不明である。壁高は35cm、堆積土は1～4、6層黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、5層浮石、炭化材片、黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、7層暗褐色土と褐色土の混土、8～9層黄褐色ローム粒を含む暗褐色土、10層にぶい黄褐色ロームと黒褐色土の混土となる。切り合い関係はFC50-01住に切られている。

遺物は床面からⅡA群土器 (第42図60、64～65)、石鏃3点、磨石3点、堆積土中からⅡA群、ⅢB群土器片が出土している。

FE48-01 竪穴住居跡 (第17図)

調査区西部で確認している。4.92×4.03mの北西辺が直線的な砲弾形を呈する住居である。壁高は東壁31cm、西壁40cm、南壁33cm、北壁41cmを測り、住居北部の一部は貼床されている。堆積土は1 a層暗褐色土、1 b層黒褐色土、2 a、2 c層にぶい黄褐色土、2 b層黒色土と黒褐色土の混土、3層暗褐色土となる。炉は南東壁から長さ90cm、幅94cmの掘り込みと石組炉からなる複式炉と考えられるが、石組炉の南側は柱穴により切られて残っていない。柱穴はP 1 (深さ33cm)、P 2 (深さ48cm)、P 3 (深さ33cm)、P 4 (深さ38cm)、P 5 (深さ44cm)、P 6の6個検出しておりいずれも主柱穴と考えられる。切り合い関係はFF48-01土坑を切っている。

遺物は床面からⅣ群土器 (第39図16)、Ⅵ群土器 (第41図40)、ミニチュア土器1点、石棒2点 (第70図1～2)、堆積土中から石鏃2点、凹石1点、敲石1点、磨石2点、盤状土製品3点が出土している。

FF56-01 竪穴住居跡 (第17図)

調査区西端で竪穴の南西部を確認している。大半が未調査で竪穴の規模・形状は不明である。壁高は

58cmを測り、堆積土は1 a～1 b層黒色土、2層黒褐色土、3層暗褐色土、4 a層褐色土と黄褐色土の混土、4 b層褐色土と暗褐色土の混土、5層暗褐色土とにぶい黄褐色土の混土となる。深さ10cm程の周溝が一部確認されている。

遺物は出土していない。

(2) 土坑

FB52-03土坑 (第17図)

調査区北部でFB52-02住床面下で確認している。開口部径0.92×0.96m、深さ29cmを測るフラスコ土坑である。堆積土は明褐色ロームを含む褐色土。

遺物は堆積土中より石鏃1点が出土している。

FB52-04土坑 (第17図)

調査区北部で確認している。開口部径1.04×1.39m、深さ40cmを測るフラスコ土坑である。堆積土は1、8、9層浮石を含む黒褐色土、2～3、11層黄褐色ローム粒、浮石を含む黒褐色土、4、7層暗褐色土と黄褐色ロームの混土、5、12層黒褐色土と暗褐色土の混土、6層暗褐色土、10層黄褐色ロームとなる。

遺物は出土していない。

FC48-01土坑 (第17図)

調査区北部で確認し半裁している。開口部径1.88m、底径2.18mを測る大型フラスコ土坑で堆積土は1、3、7、13層黒褐色土、2、11～12層暗褐色土と褐色土の混土、4～5、9層黒褐色土と褐色土の混土、6層暗褐色土とにぶい黄橙色ロームの混土、8、14、16層暗褐色土と黒褐色土の混土、10、20層黒褐色土と褐色土と黄橙色ロームの混土、15、18層黒色土と褐色土の混土、17層灰白色土、19層にぶい黄橙色ローム、21層黒色土、22層黄褐色ローム、23層にぶい黄褐色ロームと灰白色土の混土、24層褐色土と灰白色土の混土となる。切り合い関係はFC48-01住を切っている。

遺物は堆積土中からⅢA、ⅢB群土器片が出土している。

FC48-02土坑 (第18図)

調査区西部、FC48-01住堆積土中で確認している。東半分はFC48-01住調査中に気づかずに掘り下げているため全体の規模・形状は不明であるが、残存部で開口部径1.72m、深さ75cmを測る大型の土坑である。堆積土は1層黒褐色土、2層黄褐色ロームを含む黒褐色土、3～5層黒褐色土となる。

遺物は出土していない。

FC48-07土坑 (第18図)

調査区西部で確認し半裁している。土層セクション部での開口部径1.00m、底径2.94mを測る大型フラスコ土坑である。堆積土は1 a～1 b層にぶい黄褐色土を含む暗褐色土、2 a層褐色土、2 b層にぶい黄褐色土、3、7 c層暗褐色土とにぶい黄褐色土の混土、5 a、7 b、8層にぶい黄褐色土を含む黒褐色土、5 b層褐色土とにぶい黄褐色土の混土、6 a層褐色土と黒褐色土の混土、7 a層明褐色ロームと黄橙色ロームの混土となる。

遺物は堆積土中より磨石1点、凹石1点が出土している。

C50-01土坑 (第18図)

調査区北西部で確認している。0.49×0.79m、深さ29cmの小判形の土坑で、堆積土は1、3層浮石を含む

黒褐色土、2層暗褐色土と褐色土の混土、4層暗褐色土と明黄褐色ロームの混土、5層黄褐色ローム、6層暗褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土となる。

遺物は出土していない。

FE50-01～06、FE50-10～12土坑（第18図）

調査区中央部の土坑密集部を半裁している。重複する大型フラスコ土坑（FE50-05、FE50-12土坑）堆積土中に繰り返し土坑が築かれていたことが判明している。

各土坑の堆積土は下記の通りである。

FE50-01土坑～5層黒色土、6層にぶい黄褐色土。

FE50-02土坑～1層黒色土、2層褐色土を含む黒褐色土、3層にぶい黄褐色ロームを含む暗褐色土、4層黒色土と暗褐色土の混土。

FE50-03土坑～23層黒褐色土、24層褐色土、明黄褐色ロームを含む暗褐色土。

FE50-04土坑～にぶい黄褐色土と黄褐色ロームの混土。

FE50-05土坑～1層にぶい黄褐色土と褐色土の混土、2層にぶい黄褐色土と暗褐色土の混土、3、5層黄褐色ローム、4層黄褐色土と褐色土の混土、6、7層黄褐色ロームとにぶい黄褐色ロームの混土。

FE50-10土坑～21層にぶい黄褐色土を含む暗褐色土、22層にぶい黄褐色ローム。

FE50-11土坑～7～10層暗褐色土、11、14～15層黒褐色土、12層暗褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土、13層褐色土、16層明黄褐色ロームを含む褐色土、17～18層黒褐色土と褐色土の混土、19層明黄褐色ローム、20層明黄褐色ロームを含む黒褐色土。

FE50-12土坑～25、26層褐色土と黒褐色土の混土、27～28層黄褐色ローム、29～30層暗褐色土、31層にぶい黄褐色土、32層明黄褐色ロームとにぶい黄褐色ロームの混土、33層暗褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土、34層明黄褐色ローム、35層浅黄色ロームとにぶい黄褐色ロームの混土。

遺物はFE50-01土坑堆積土中より石鏃1点、凹石1点、磨石1点、砥石1点、FE50-05土坑堆積土中よりⅢA群土器片（第43図70）、石皿1点、FE50-12土坑よりⅢB群土器（第37図5、43図79、44図101）が出土している。

FE52-04土坑（第17図）

調査区中央部で検出し半裁している。『御所野Ⅰ』で7号墓壙として報告されているもので、北半は調査区外に広がっており規模・形状は不明である。土層セクションでの開口部径1.25m、底径1.67mを測るフラスコ土坑である。堆積土は1～2層黒色土、3層黒褐色土、4層褐色土を含む黒褐色土、5a～5b層炭化材を含む黒褐色土、6層黒色土と黒褐色土の混土、7層暗褐色土、8～9層褐色ローム（壁崩落土）、10層黒褐色土、11層褐色土を含む暗褐色土、12層にぶい黄褐色ロームを含む黒褐色土、13層にぶい黄褐色ローム、14層暗褐色土、15層黄褐色ローム、16層黒褐色土、17層にぶい黄褐色土と褐色土の混土、18層黒褐色土、19層明黄褐色ロームとなる。土層セクションの観察から大型フラスコ土坑（9、11～19層）を再利用し墓壙（1～8、10層）を築いたものと思われる。

FF52-04土坑（第18図）

調査区中央部の土坑群中で検出し半裁している。土層セクションで開口部径1.42m、底径1.45mを測るフラスコ土坑である。堆積土は1層褐色土を含む黒褐色土、2層黒褐色土、3層暗褐色土と黄褐色ローム、黒

褐色土の混土、4～5層暗褐色土と黒褐色土の混土、6～7層黒褐色土と黄褐色ロームの混土、8層褐色土と黄褐色ロームの混土、9層黒色土、10層黒色土を含む黄褐色ローム、11層暗褐色土と黄褐色ロームの互層、12層浮石を含む黒色土となる。

遺物は出土していない。

FF52-05土坑（第18図）

調査区中央部の土坑群中で検出し半裁している。『御所野 I』でFF52フラスコ土坑として報告されているもので、土層セクション部で開口部径0.92m、底径1.77mを測る大型のフラスコ土坑である。堆積土は1層暗褐色土と褐色土の混土、2層にぶい黄褐色ロームを含む黒褐色土、3～4層黄褐色～黄橙色ロームを含む黒褐色土、5～6層黒褐色土、7層黒褐色土と暗褐色土の混土、8、10層にぶい黄褐色土と黄褐色ロームの混土、9層褐色土と黒褐色土の混土となる。当土坑の上部から5号墓壙が検出されている。5号墓壙は当土坑を再利用した土坑なのかもしれない。

遺物は出土していない。

FF56-01土坑（第18図）

調査区東部で検出し半裁している。土層セクション部で深さ1.02mを測る大型のフラスコ土坑である。堆積土は1 a～1 b層黒色土、1 c層黒色土と暗褐色土の混土、1 d、2層黒褐色土、3 a～3 c、8～9、11層暗褐色土、4、20層褐色土、5 a～5 c、14、16～17、19、23層褐色土と暗褐色土の混土、6～7、13、18、21～22層明黄褐色ローム、10、12、15層黄褐色ロームを含む暗褐色土となる。

遺物は出土していない。

FG54-01土坑（第18図）

調査区東部のFG56遺構下で確認している。開口部径1.30×1.55m、底径2.18mを測る大型フラスコ土坑である。堆積土は1層褐色土を含む暗褐色土、2、16層褐色土、3、7、10～11層にぶい黄褐色ローム、4、12、18層黄褐色ロームとにぶい黄褐色ロームの混土、5、9、13、15層黒褐色土、6層暗褐色土、8層黄褐色ロームを含む黒褐色土、14、17層黒褐色土と褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土となる。

遺物は出土していない。

(3) 掘立柱建物跡・柱列・柱穴群（第3、19～21図）

柱穴636個検出し内438個掘り下げ、柱配置から掘立柱建物跡7棟、柱列2列を並べている。

柱穴の確認面からの深さは30cm以下のもの160個（36.5%）、31～60cmのもの55個（41.3%）、61～90センチのもの43個（9.8%）、90cmを超えるもの54個（12.3%）となる。大きく60cm以下の浅いものと90cmを超える深いものとに分かれる傾向がある。深さ90cmを超える大規模な柱穴のうち17個（31.5%）は掘立や柱列に伴っていることが判明しているが、並べることができなかった大規模な柱穴は検出した掘立柱建物跡や柱列の周辺に分布していること、規模や堆積土がなら掘立の柱穴と変わらないことなどからみて、大部分が掘立や柱列に伴うものかもしれない。

遺物は柱37、45柱痕から炭化種子類が大量に出土している（カラーグラビア・VI章1に分析結果掲載）。

FB52掘立柱建物跡（第3、19図）

調査区北端に位置する。南北に1間、東西に2間の6本柱の建物で、東西の柱間は2.10m（柱1～柱2）、2.30m（柱2～187）、2.30m（柱475～21）、2.15m（柱21～223）、南北の柱間は2.45m（柱1～475）、2.50m（柱

2～21)、2.20m(柱187～223)で、各柱穴の掘方の規模は柱1-径44×55cm、深さ80cm、柱2-径35×44cm、深さ98cm、柱187-径35×42cm、深さ88cm、柱475-径38×40cm、深さ25cm、柱21-径45×57cm、深さ39cm、柱223-径30×36cm、深さ40cmとなっており、柱痕は柱2(径36cm)で確認している。柱187、2は建て替えてられており柱518、256は建て替え前の柱穴と思われる。

FC50-1掘立柱建物跡(第3、19図)

調査区北西部に位置する。南北に1間、東西に2間の6本柱の建物で、東西の柱間は2.95m(柱27～柱353)、2.88m(柱353～85)、2.78m(柱534～25)、2.90m(柱25～38)、南北の柱間は2.78m(柱27～534)、3.00m(柱353～25)、2.74m(柱85～38)で、各柱穴の掘方の規模は柱27-径64×68cm、深さ110cm、柱353-径61×63cm、深さ114cm、柱85-径55×64cm、深さ150cm、柱534-径50×55cm、深さ115cm、柱25-径61×74cm、深さ128cm、柱38-径54×62cm、深さ105cmとなっており、柱痕は柱353(径28cm)、柱85(径28cm)、柱25(径32cm)、柱38(径32cm)で確認している。

FC50-2掘立と重複している。柱353は柱18に柱534は柱23に切られていることからFC58-02掘立より古い建物と思われる。

FC50-2掘立柱建物跡(第3、19図)

調査区北西部に位置する。南北に1間、東西に2間の6本柱の建物で、東西の柱間は2.70m(柱351～柱18)、2.28m(柱18～323)、2.45m(柱23～24)、2.20m(柱24～333)、南北の柱間は2.85m(柱351～23)、2.90m(柱18～24)、2.65m(柱332～333)で、各柱穴の掘方の規模は柱351-深さ70cm、柱18-径56cm、深さ98cm、柱332-径48×50cm、深さ87cm、柱23-径64×69cm、深さ65cm、柱24-径69cm、深さ93cm、柱333-径54×62cm、深さ64cmとなっており、柱痕は柱24(径32cm)で確認している。

FC50-1掘立と重複している。柱18は柱353を柱23は柱534を切っていることからFC58-1掘立より新しい建物と思われる。

FC48掘立柱建物跡(第3、20図)

調査区西部に位置する。南北に1間、東西に2間の6本柱の建物で、東西の柱間は3.35m(柱37～柱40)、3.12m(柱40～562)、3.37m(柱45～556)、3.02m(柱556～560)、南北の柱間は3.50m(柱37～45)、3.40m(柱40～556)、3.30m(柱562～560)で、各柱穴の掘方の規模は柱37-径69×83cm、深さ128cm、柱40-径60×70cm、深さ102cm、柱562-径64×73cm、深さ146cm、柱45-径71×72cm、深さ103cm、柱556-径61×62cm、深さ67cm、柱560-径63×65cm、深さ118cmとなっており、柱痕は柱37(径36cm)、柱40(径37cm)、柱562(径35cm)、柱45(径38cm)、柱556(径32cm)で確認している。

炭化種実が柱37、45柱痕から多量に出土している。

FF48掘立柱建物跡(第3、20図)

調査区西部に位置する。南北に1間、東西に2間の6本柱の建物である。柱642は未調査、柱681は検出面から30cm程掘り下げたところ、柱穴のほぼ全面に扁平な石が入っていたためそれ以上は掘り下げなかった。東西の柱間は1.77m(柱674～柱693)、1.76m(柱693～691)、2.05m(柱678～642)、1.80m(柱642～681)、南北の柱間は2.15m(柱674～678)、2.40m(柱693～642)、2.30m(柱691～681)で、各柱穴の掘方の規模は柱674-径65×67cm、深さ128cm、柱693-径55×58cm、深さ107cm、柱691-径62×68cm、深さ102cm、柱678-径61×70cm、深さ116cm、柱642-径53×55cm、柱681-径49×36cmとなっており、柱痕は柱674(径

38cm)、柱693(径38cm)、柱691(径38cm)、柱678(径24cm)で確認している。

FG50掘立柱建物跡 (第3、20図)

調査区南部に位置する。南北に1間、東西に2間の6本柱の建物であり、いずれの柱穴も半裁し完掘せずに保存している。

東西の柱間は2.30m(柱665～柱666)、1.92m(柱666～670)、2.40m(柱684～668)、1.80m(柱668～671)、南北の柱間は2.15m(柱665～684)、2.45m(柱666～668)、2.30m(柱670～671)で、各柱穴の掘方の規模は柱665-径82cm、深さ117cm、柱666-径67cm、深さ124cm、柱670-径62cm、深さ123cm、柱684-径82cm、深さ127cm、柱668-径68cm、深さ132cm、柱671-径58cm、深さ140cmとなっており、柱痕はいずれの柱穴からも確認でき柱痕径は柱665-径38cm、柱666-径32cm、柱670-径24cm、柱684-径34cm、柱668-径33cm、柱671-径23cmとなる。

FG50柱列 (第3、21図)

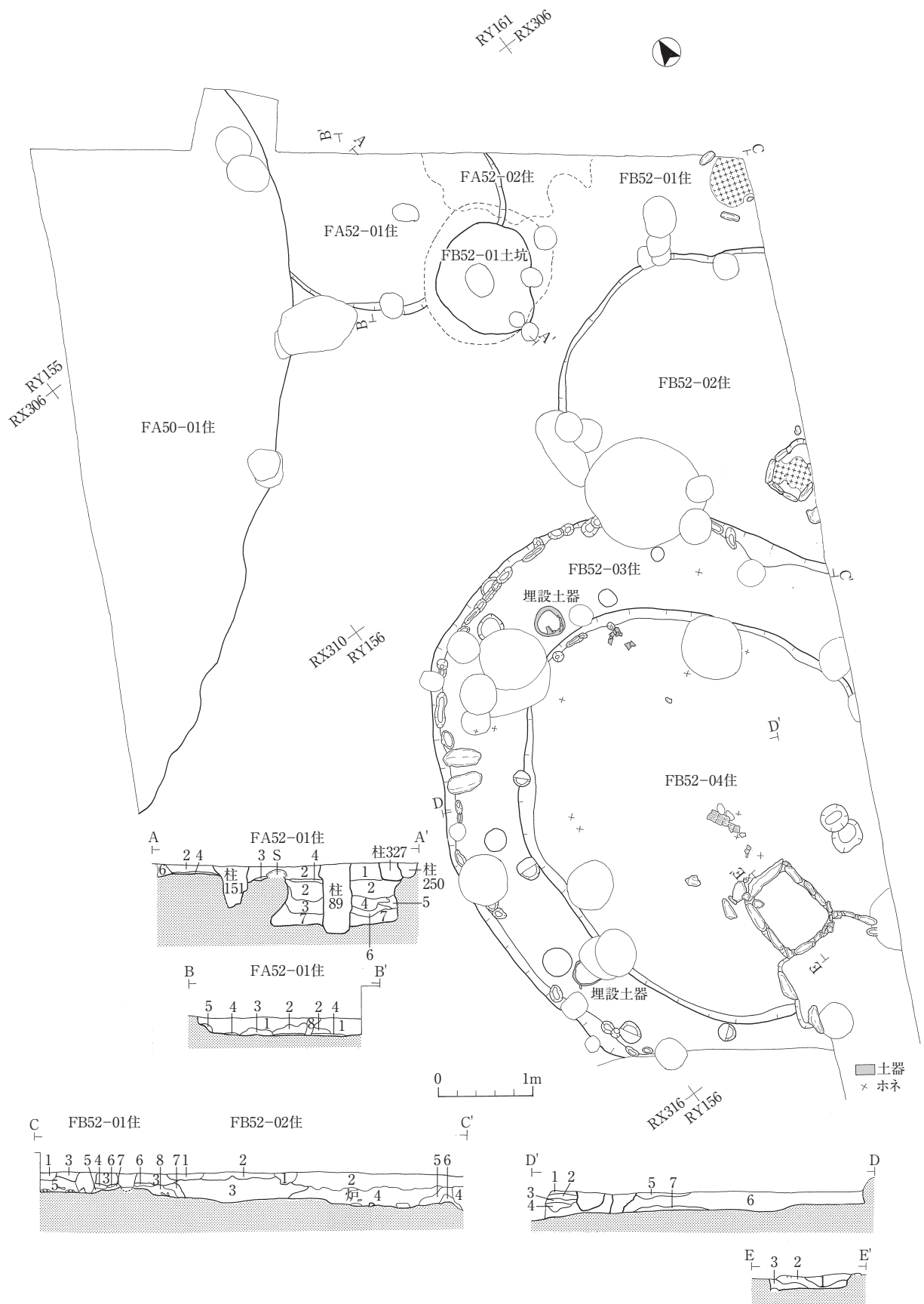
調査区北部に位置する。東西に3間の4本柱の柱列である。柱間は東から1.24m、1.08m、1.07mを測る。各柱穴の掘方の規模は柱8-径62×65cm、深さ97cm、柱9-径43×53cm、深さ120cm、柱10-径52×56cm、深さ124cm、柱11-径52×56cm、深さ98cmとなっており、柱痕は柱8(径30cm)、柱10(径30cm)で確認している。

FF46柱列 (第3、21図)

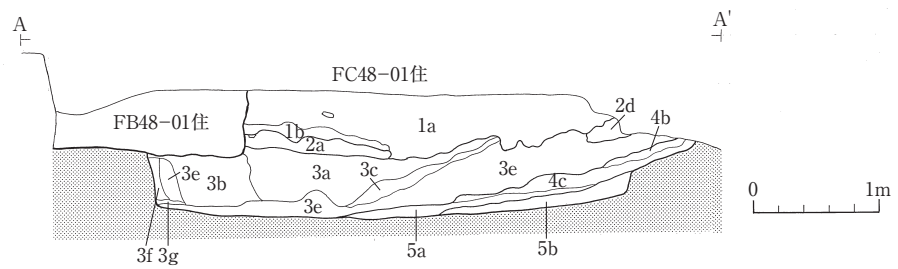
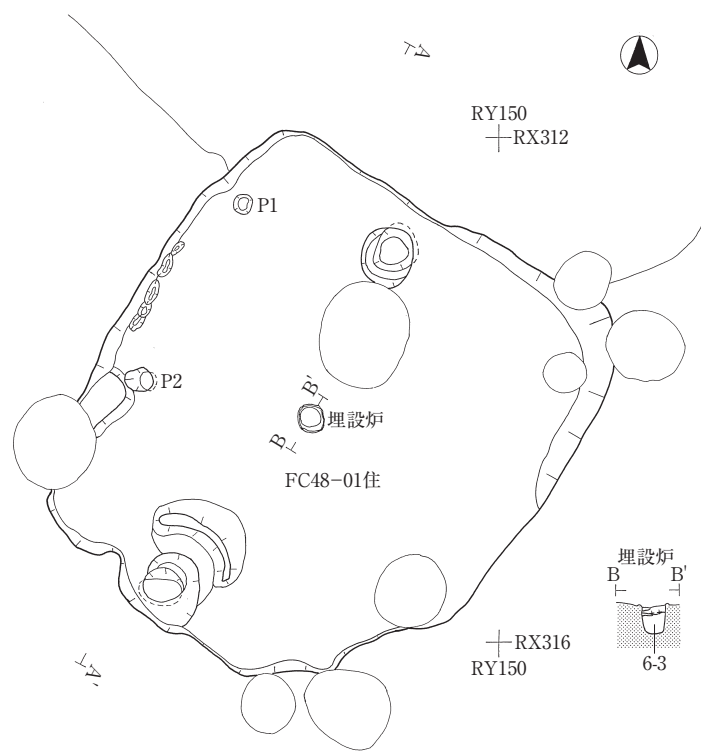
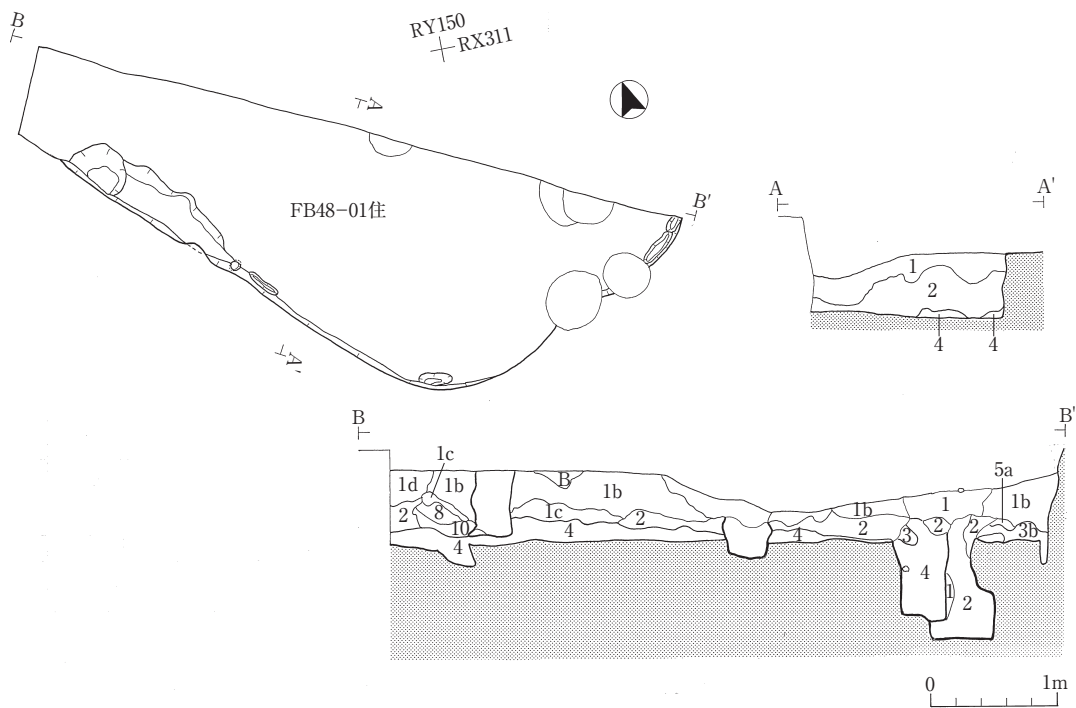
調査区南西部に位置する。東西に3間の4本柱の柱列である。柱間は東から2.12m、1.60m、1.75mを測る。各柱穴の掘方の規模は柱645-径42×46cm、深さ45cm、柱96-径32×34cm、深さ27cm、柱66-径30×34cm、深さ45cm、柱52-径48×52cm、深さ50cmとなっている。



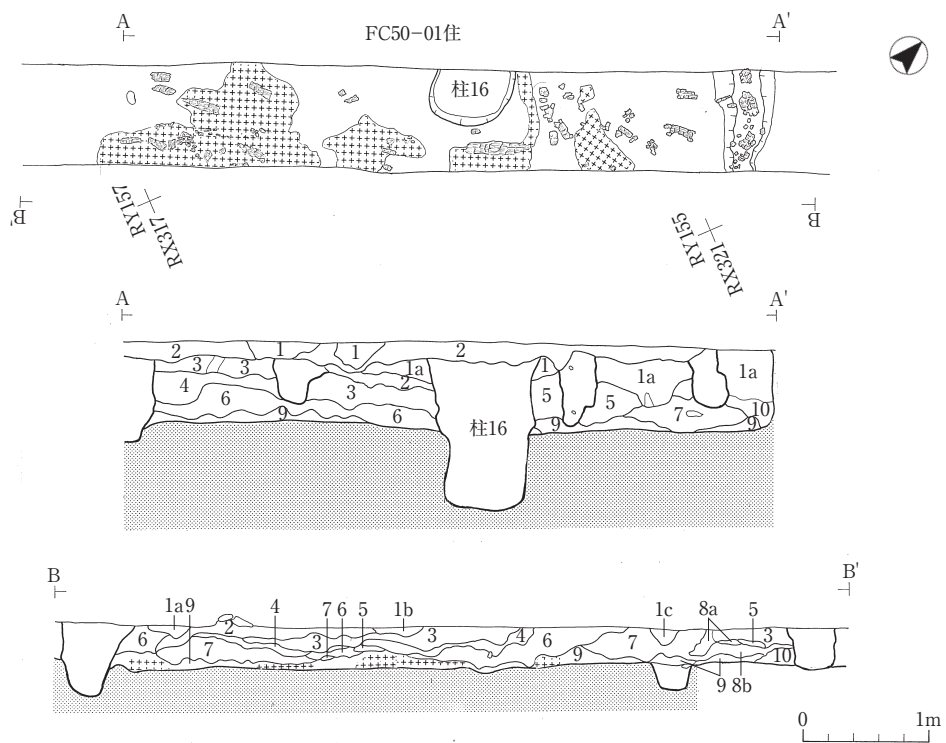
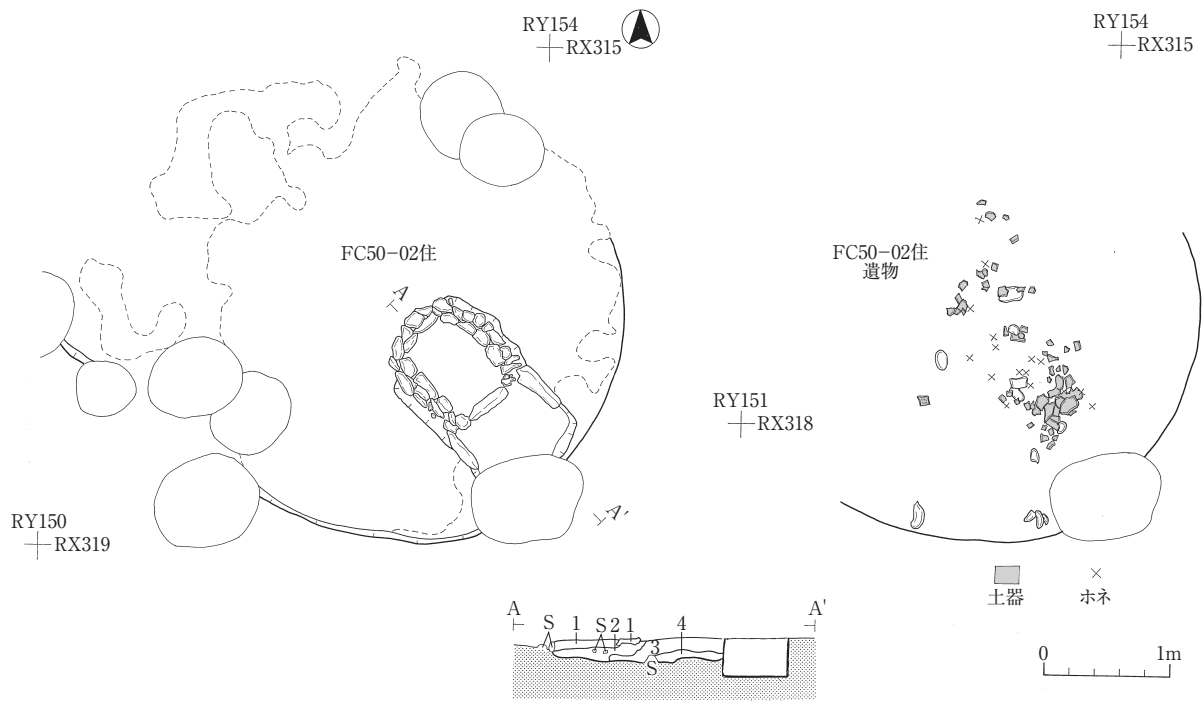
第12図 II b区全体図



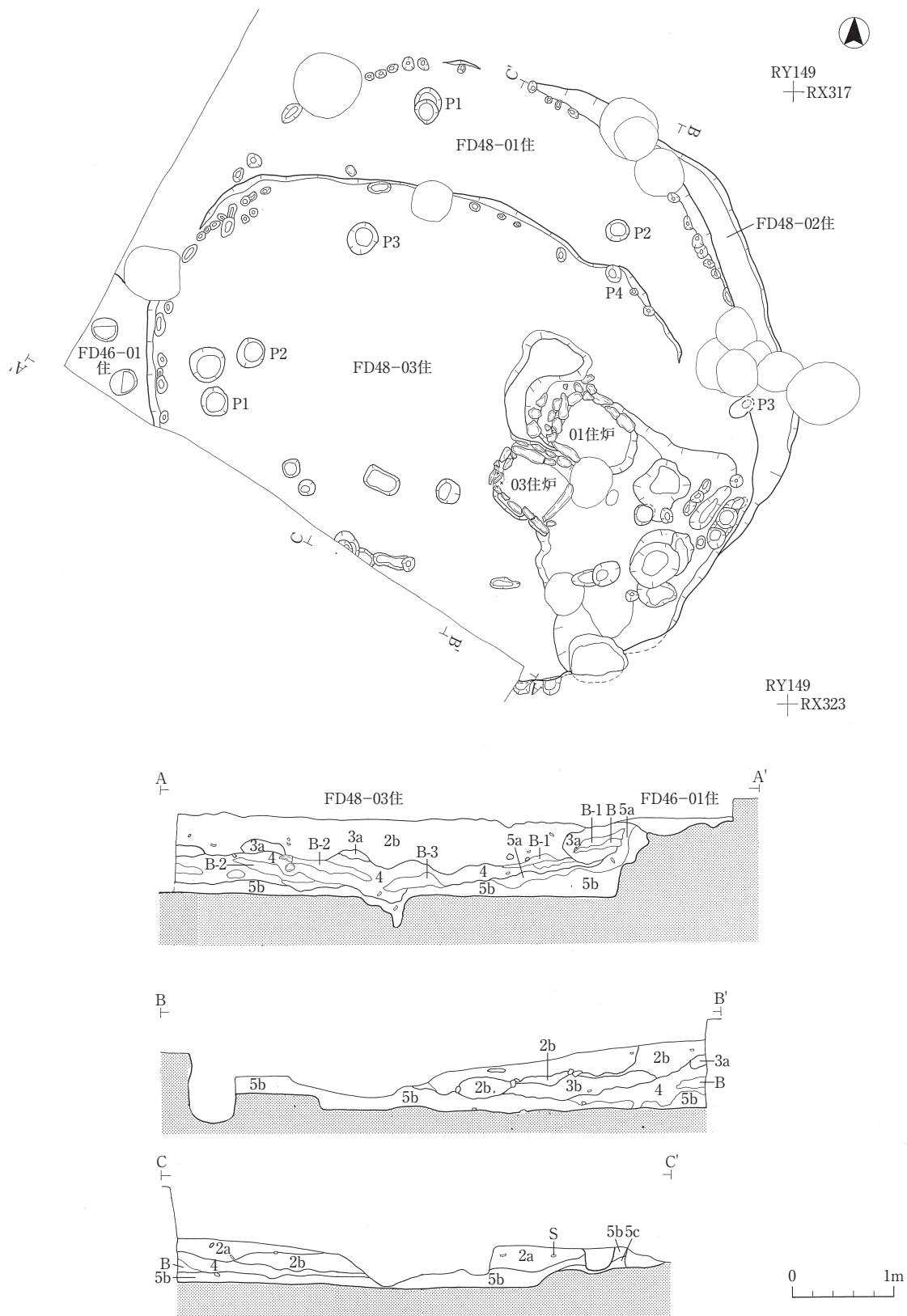
第13図 II b区検出遺構 (1)



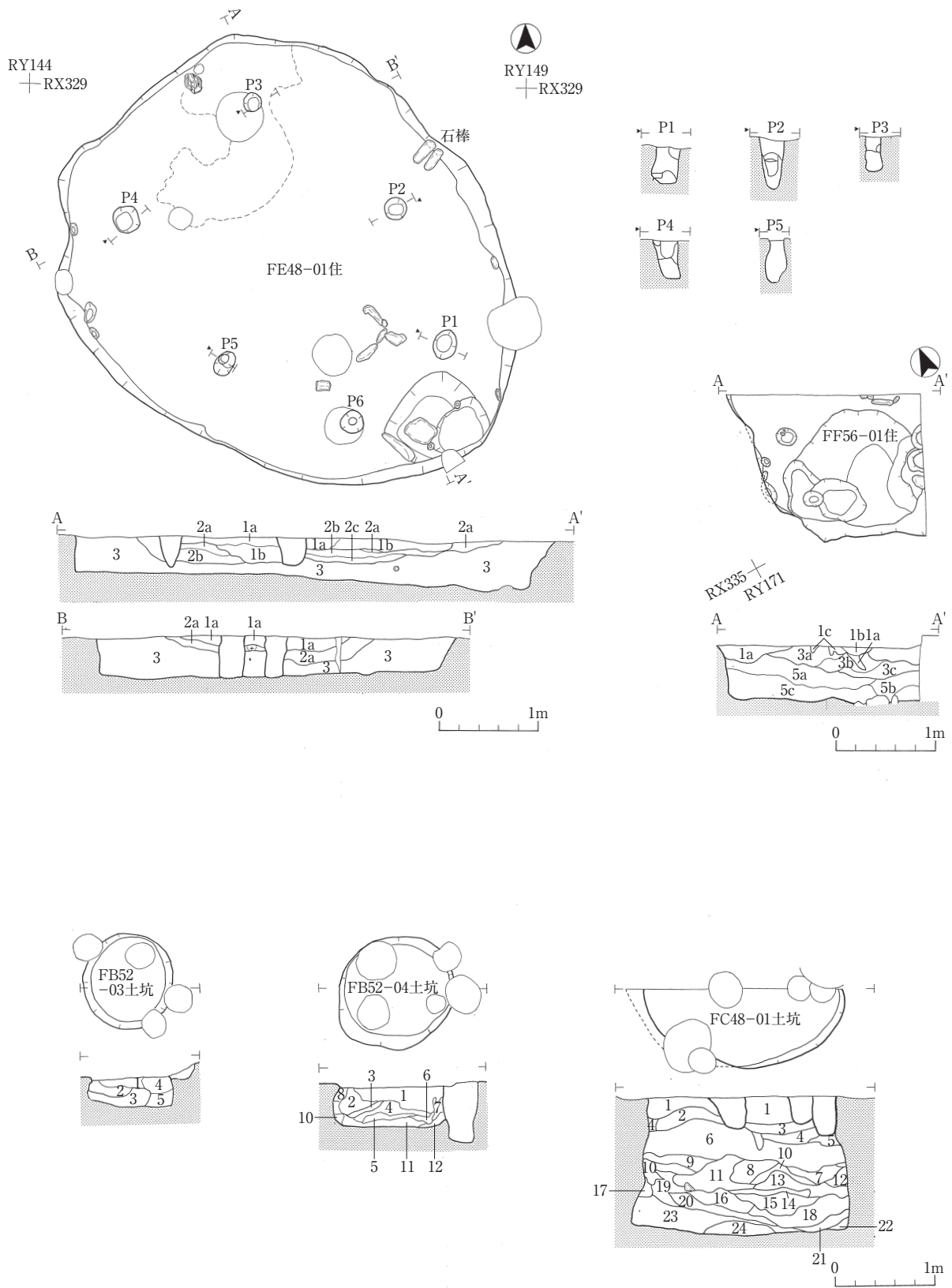
第14図 II b区検出遺構 (2)



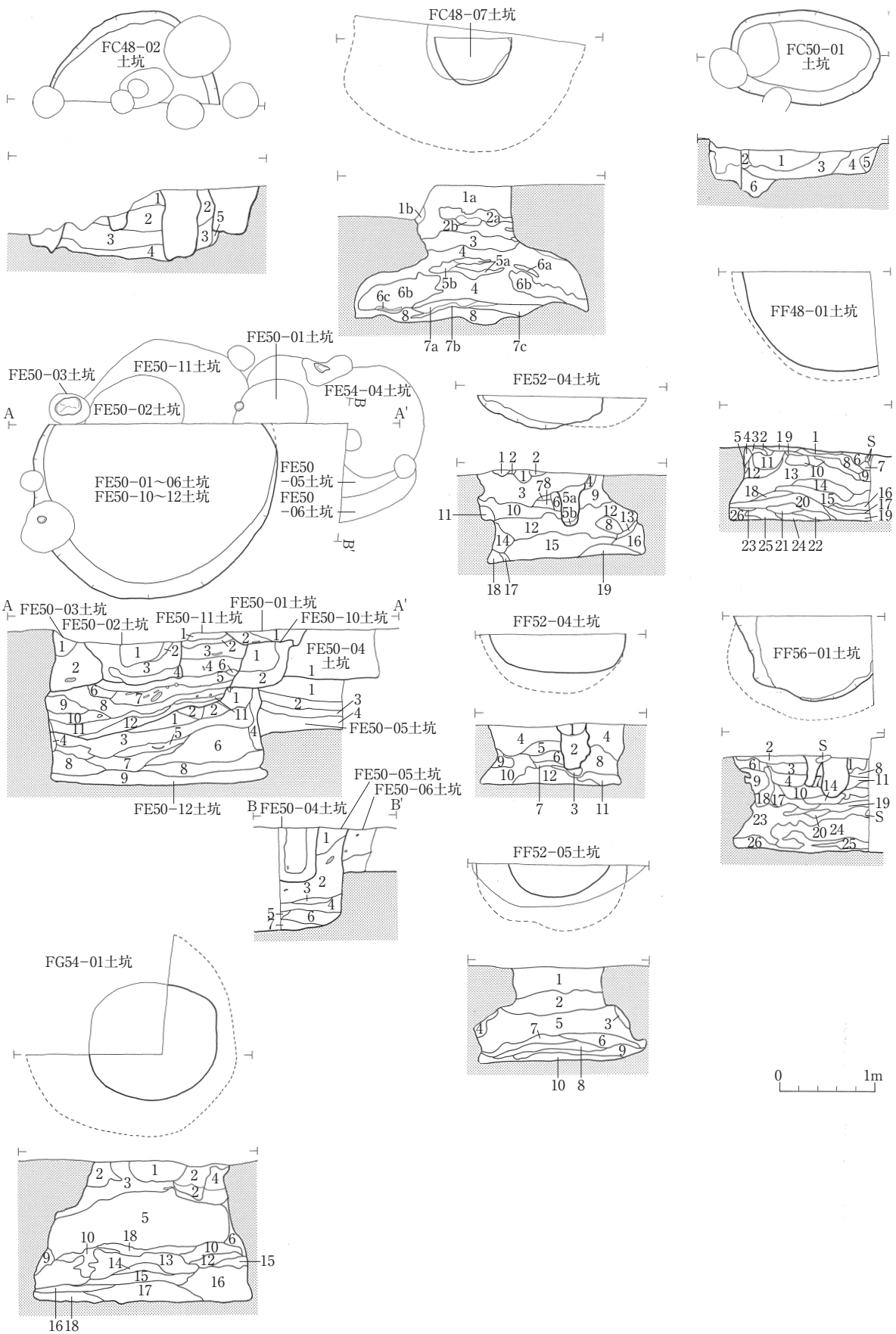
第15図 II b区検出遺構 (3)



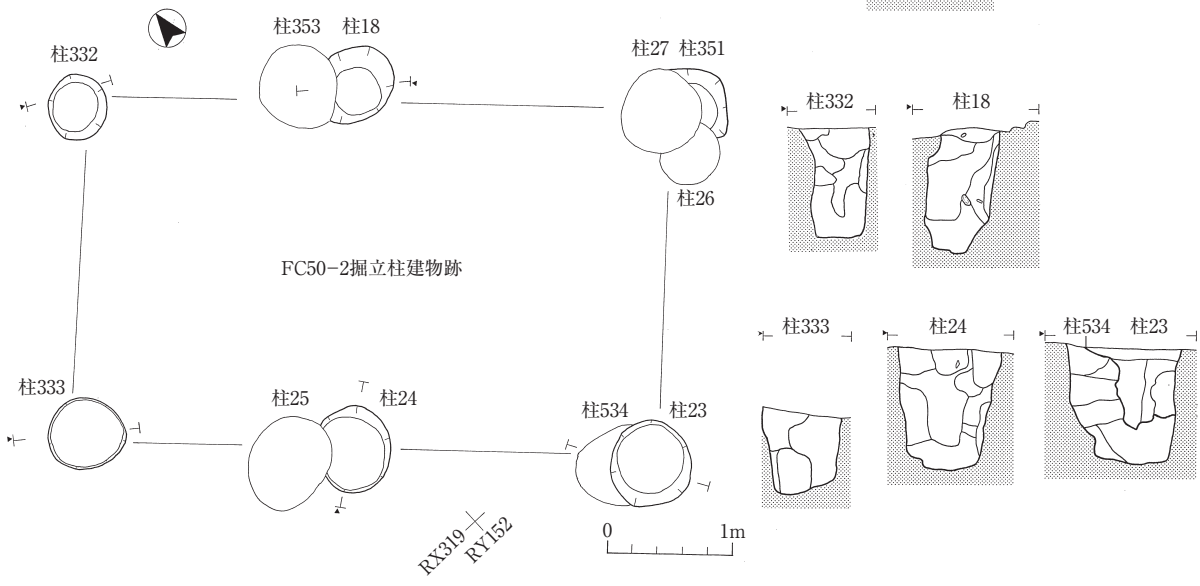
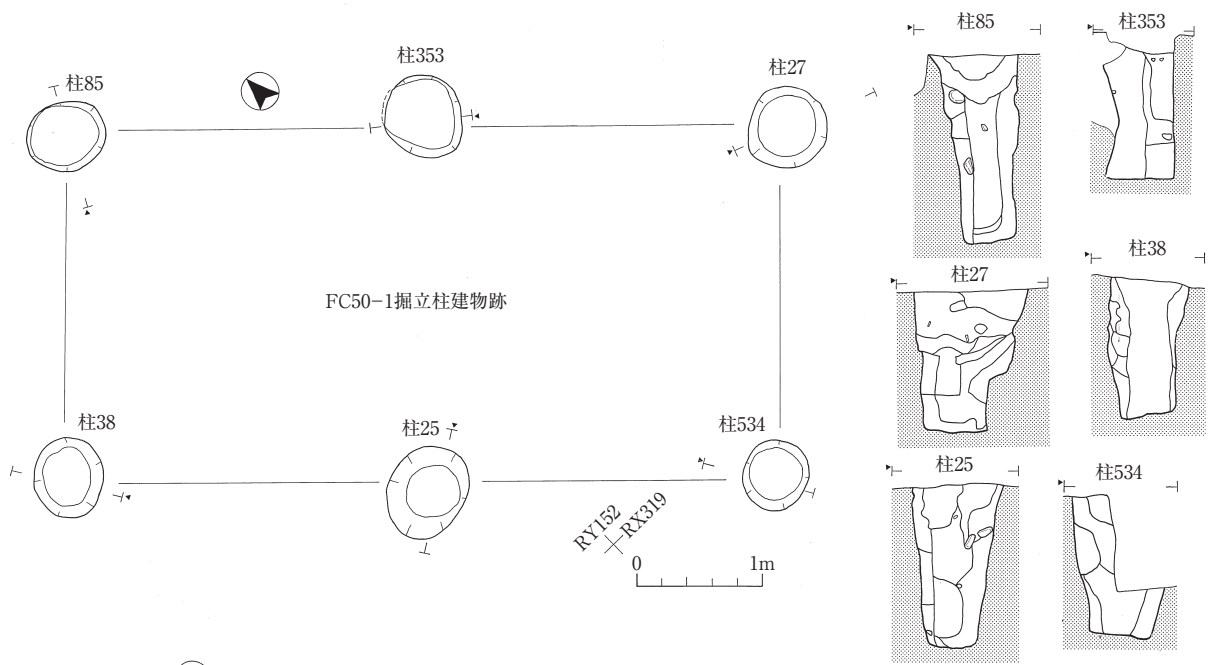
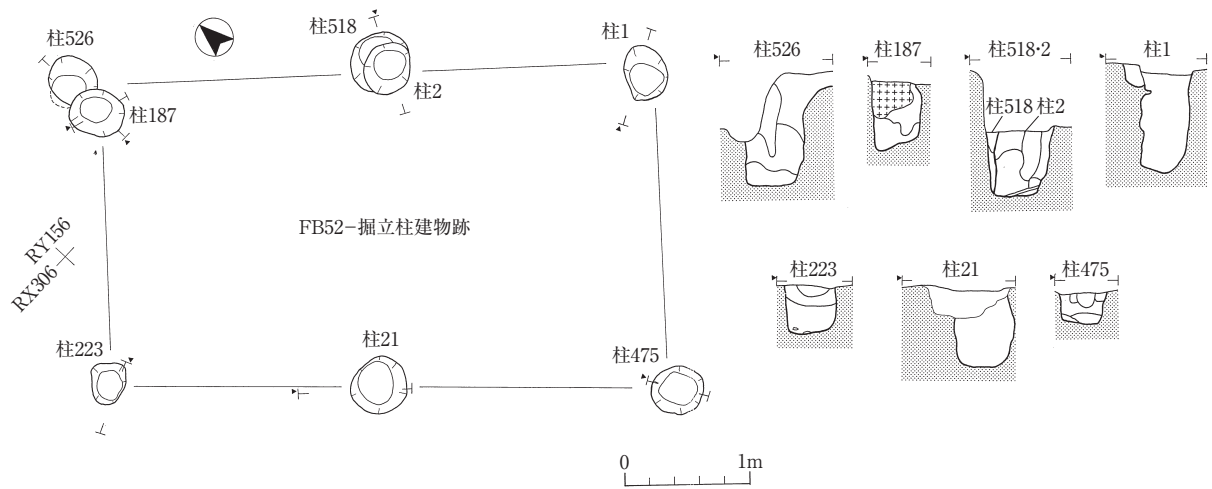
第16図 II b区検出遺構 (4)



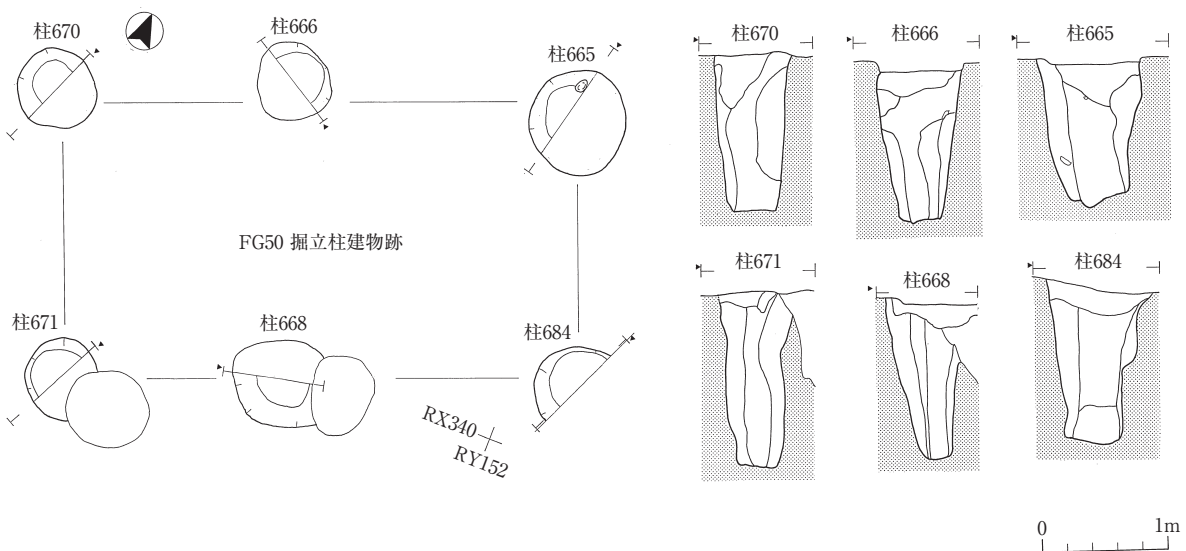
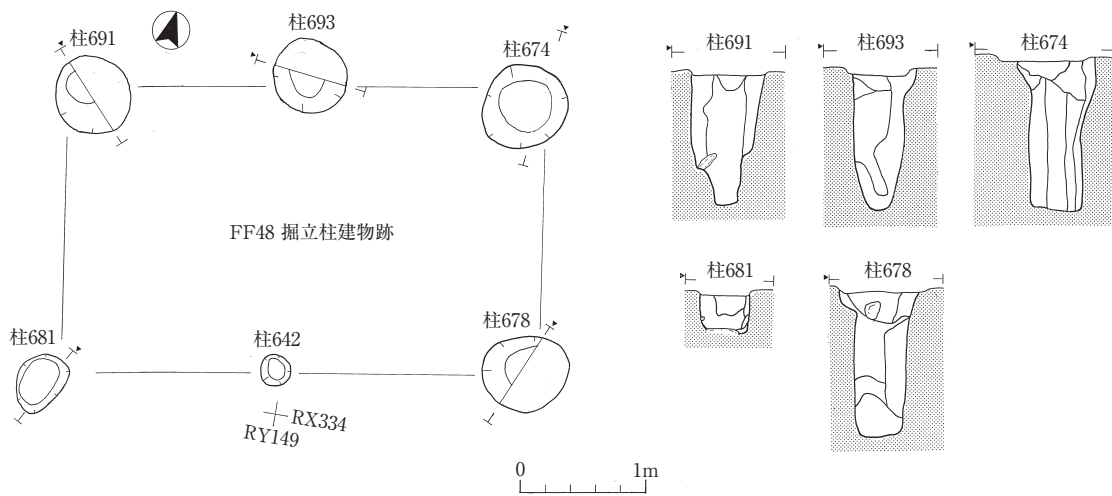
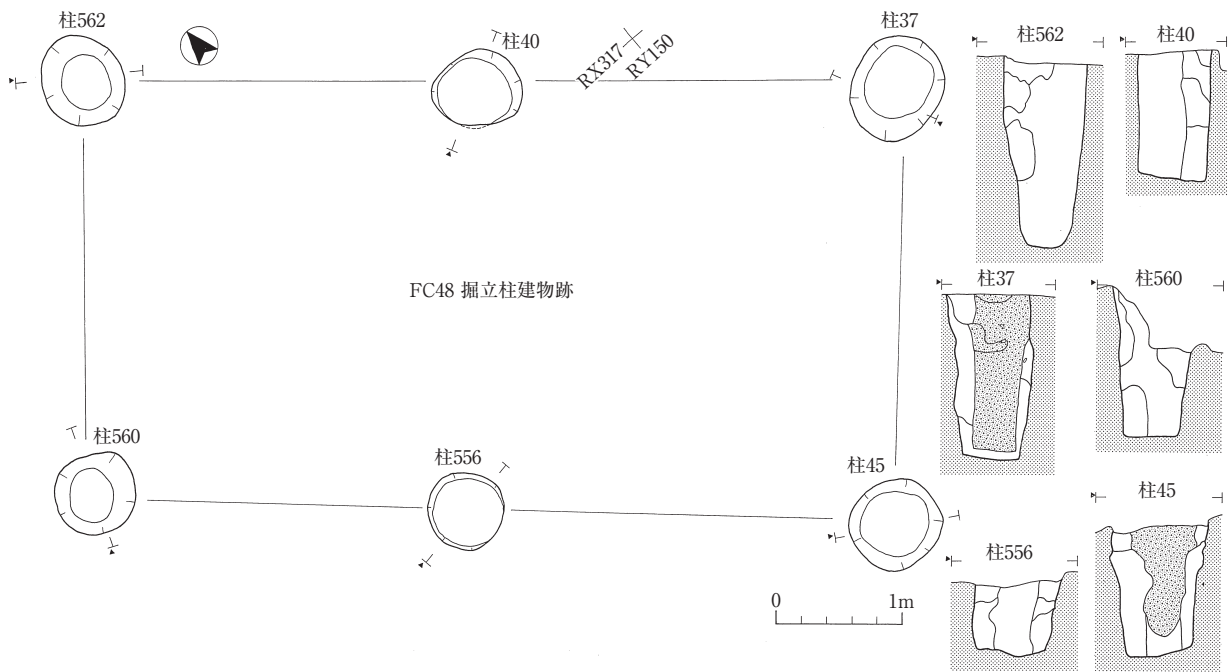
第17図 II b区検出遺構 (5)



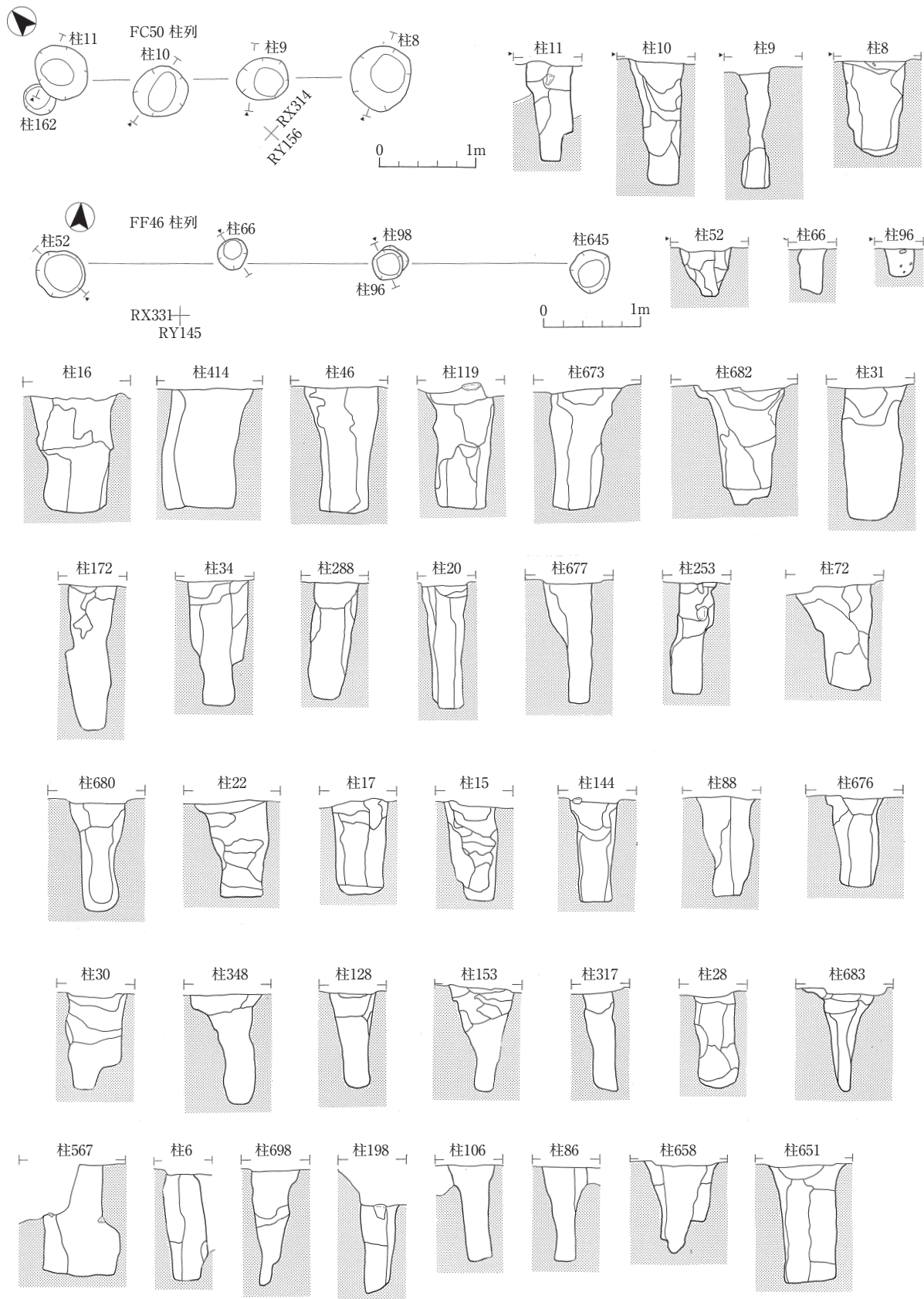
第18图 II b区検出遺構 (6)



第19图 II b区検出遺構 (7)



第20図 II b区検出遺構 (8)



第21图 II b区検出遺構 (9)

PL 5 II b 調査区(1)



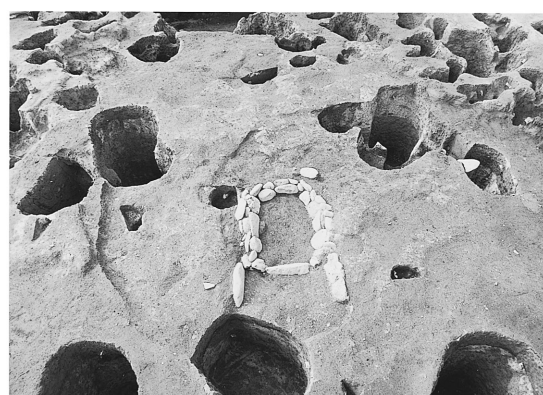
全景 (南より)



調査区西部 (南より)



FB52-04住居跡



FC50-02住居跡



FB48-01住居跡



FC48-01住居跡



FD48-01・03住居跡



FE48-01住居跡

PL 6 II b 調査区 (2)



FF56-01土坑土層セクション



FC48-01土坑土層セクション



柱37



柱37炭化種子出土状況



柱45



柱45炭化種子出土状況



FF54遺構



FE52遺構

3. Ⅲ区（第22図）

Ⅲ調査区は配石遺構群の西側に位置し、調査面積は約235㎡で、全域がほぼ平坦である。

表土を除去し竪穴や土坑が調査区全域に密集していることを確認している（第22図）。調査区の北端と中央部に東西方向のトレンチを入れこれらの竪穴住居群や土坑群の一部を調査している。

調査区全域で確認した遺構数は竪穴住居跡24棟、土坑7基、柱穴9個に及ぶが、未検出の遺構も多数あるものと思われる。ここでは北側トレンチ、中央トレンチで遺構の一部を掘り下げたものについて記述する。

（1）竪穴住居跡

EH40-01竪穴住居跡（第22図）

北側トレンチ西端で住居北東部を調査している。住居の形状・規模は未調査部が多く不明。壁高は30cm。堆積土は黒褐色土となる。切り合い関係はEH42-01住を切り、柱4に切られている。

遺物は出土していない。

EH42-01竪穴住居跡（第22図）

北側トレンチで住居北部を調査している。住居の形状・規模は検出した平面プランから径4.50m程の円形の竪穴と思われる。壁高は20cm。堆積土は焼土粒を含む黒褐色土となる。切り合い関係はEH40-01住、柱2に切られている。

遺物は出土していない。

EH42-02竪穴住居跡（第22図）

北側トレンチで住居南部を調査している。竪穴の大半は調査区外に広がっており住居の形状・規模とも不明であるが、トレンチ北壁では径3.80mを測る。壁高は14～25cm。堆積土は1層黒褐色土にぶい黄褐色ロームの混土、2層にぶい黄褐色ロームを含む黒褐色土と暗褐色土の混土となる。切り合い関係はEH42-03住を切っている。

遺物は堆積土中よりⅢB群・Ⅳ群土器片（1層）、石鏃1点が出土している。

EH42-03竪穴住居跡（第22図）

北側トレンチで住居南西部を調査している。竪穴の大半は調査区外に広がっており住居の形状・規模とも不明である。壁高は50～56cm。堆積土は1層黄褐色ロームを含む暗褐色土、2層黒褐色土と暗褐色土の混土、3層微量の焼土粒を含む黒褐色土、4層黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色土、5層暗褐色土と黒褐色土の混土となる。切り合い関係はEH42-02住、EI42-03住に切られ、EI44-01住を切っている。

遺物は出土していない。

EI42-01竪穴住居跡（第22図）

中央トレンチで調査している。住居の形状・規模は平面プランから南北9.22m、東西7.40m程の楕円形の大型住居と思われる。壁高は50cm。堆積土は1a層黒褐色土と暗褐色土の混土、1b層黒褐色土、1c層褐色土と暗褐色ロームの混土、1d層土器片や川原石を多量に含む黒褐色土、1e層暗褐色土、1f層ローム粒を含む褐色土、2a～2b層暗褐色土、3a～3b、4層黄褐色ローム粒を含む暗褐色土、5～6層黄褐色ローム粒を含む褐色土、7層にぶい黄褐色ロームと黄褐色ロームの混土となる。切り合い関係はEI42-02住、EI42-03住、EI44-02住、EJ42-01住、EJ40-03住を切り、EJ42-01～03土坑に切られている。

遺物は堆積土中からⅣ群・Ⅴ群土器片（1層）、石鏃3点、有孔石製品1点、斧状土製品4点、盤状土製

品3点が出土している。

EI44-01 竪穴住居跡（第22図）

北側トレンチで住居の一部を調査している。大方未調査であり住居の形状・規模とも不明であるが、トレンチ南壁の土層セクションでは径6.50mを測る。壁高は西壁は30cm程で東壁は崩れている。堆積土は1層焼土粒を含む黒褐色土、2層にぶい黄褐色ロームを含む暗褐色土、3層黒褐色土、4層焼土粒、にぶい黄褐色ローム粒を含む黒褐色土、5 a～5 b層褐色土を含む暗褐色土、6 a～6 c層黒褐色土と褐色土の混土、6 d層黒褐色土、7層黒褐色土と暗褐色土とにぶい黄褐色ロームの混土、8層褐色土と暗褐色土の混土、9層にぶい黄褐色ローム粒を含む暗褐色土となる。切り合い関係はEH42-03住、EI42-03住に切られている。

遺物は堆積土中からⅡA群・ⅢB群（1層）・Ⅳ群（1層、3層）土器片、石鏃3点、石錐1点、三角形土製品1点、有孔土製品1点、盤状土製品4点が出土している。

EI44-02 竪穴住居跡（第22図）

中央トレンチで住居の一部を調査している。遺構確認面の平面プランより南北6.30m、東西5.00m程の楕円形の住居と思われる。壁高は54cm。堆積土は1a層暗褐色土と黒褐色土の混土、1 b層黄褐色ロームを含む暗褐色土、2層黄褐色ロームを含む暗褐色土、3層黒褐色土、4層褐色土と黄褐色ロームの混土となる。竪穴に伴う柱穴は1個検出しており（P1・深さ50cm）主柱穴と考えられる。切り合い関係はEI42-01住に切られている。

遺物は出土していない。

（2）土坑

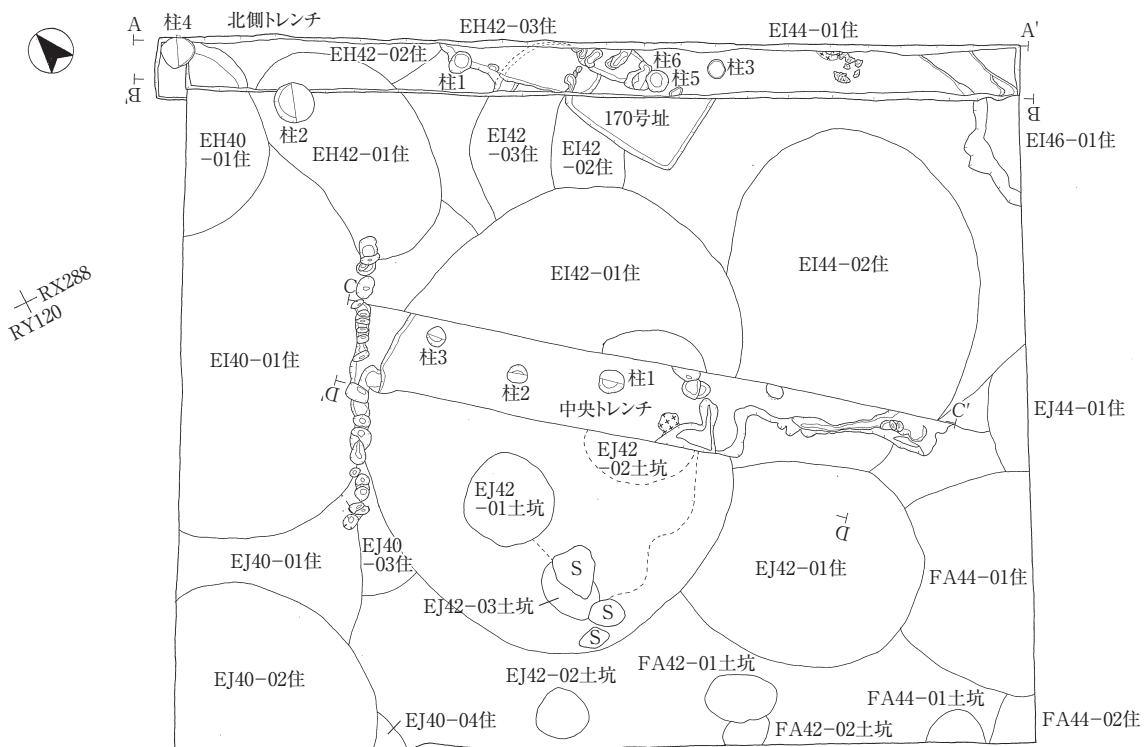
調査区南東部で小判形の土坑5基、中央部で円形の土坑を2基検出している。検出した土坑の内6基は未調査で、1基は中央トレンチで一部を掘り下げ調査している。調査区南東部は配石遺構群に伴う石が分布していたことなどから小判形の土坑は墓坑の可能性が高い。EJ42-03土坑は検出面周辺から河原石を3個検出（長さ104cm、72cm、30cm）している。

EJ42-02 土坑（第22図）

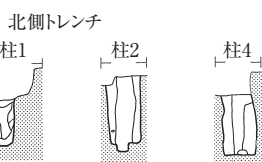
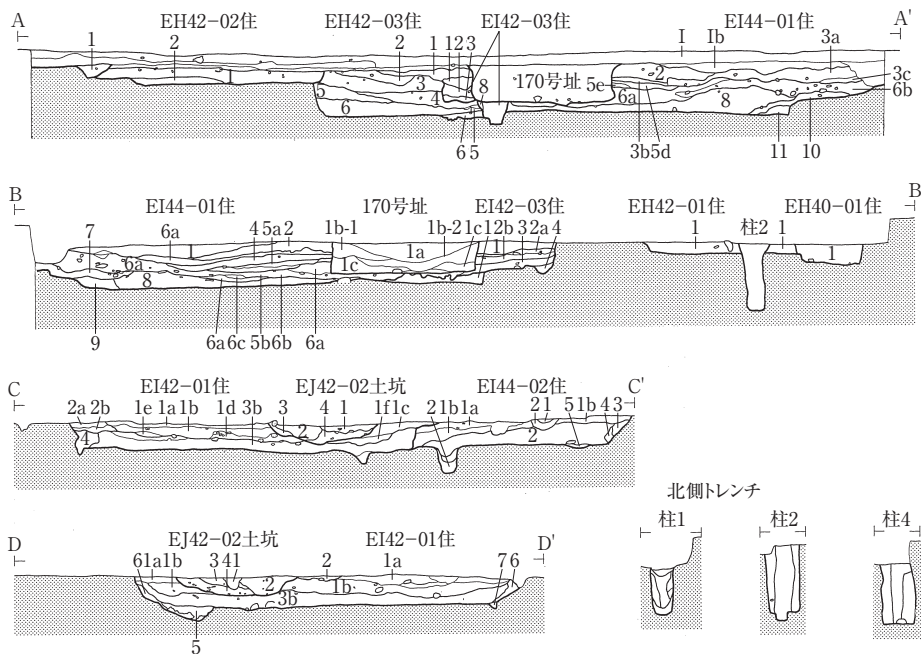
中央トレンチで調査している。開口部径3.16m×2.15m程の円形の土坑で、断面形態は皿形を呈する。土層セクション部での深さは0.34m、堆積土は1層黒色土、2層黒褐色土、3層暗褐色土、4層黒褐色土と暗褐色土の混土となり、どの層にも焼土粒や炭化材片、小石、細かな土器片が含まれている。切り合い関係はEI42-01住を切っている。

（3）柱穴群（第22図）

北側トレンチで6個、中央トレンチで3個計8個柱穴を検出している。柱穴の分布は希薄である。柱1（深さ87cm）、柱4（深さ146cm）、柱穴2（深さ162cm）以上3個はかなり大規模なもので、掘立柱建物跡に伴う柱穴、あるいはシンボリックな柱穴の可能性が高い。



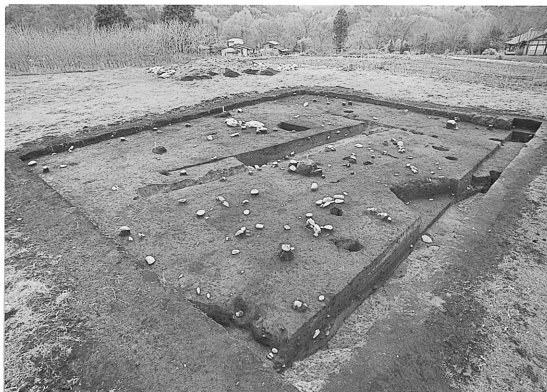
RX288
RY120



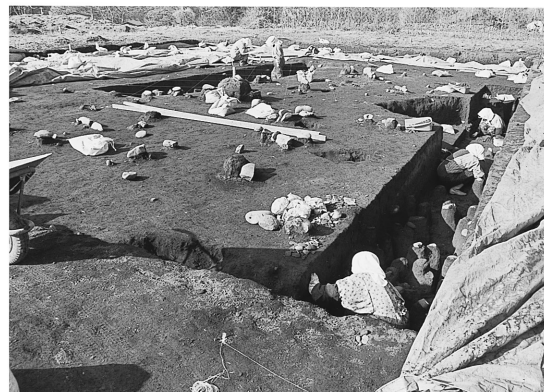
0 2m

第22図 III区全体図

PL 7 Ⅲ調査区



調査区全景（東より）



作業風景



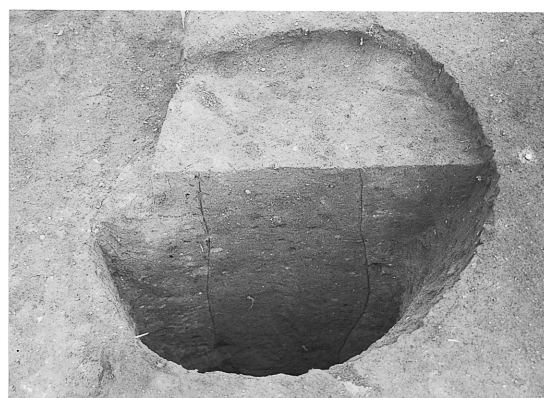
作業風景



中央トレンチ（東より）



北トレンチ（東より）



中央トレンチ柱穴土層セクション



柱1土層セクション



現地説明会風景

4. IV区 (第23図)

IV調査区は配石遺構の南側、盛土遺構に位置し、調査面積は約300㎡で、南から北へ緩やかに傾斜している。盛土遺構は配石遺構の南側東西80～90m、南北に30mの範囲に分布し最大1.40m程配石面より高くなっている。今回の調査では平成4年度に調査したFH46・FJ46・GA44トレンチ周辺部の表土を除去し、調査している。平成4年度の調査で盛土は下記のように1～3層に分け報告している(『御所野I』に掲載)。

盛土1層：淡黄色土と黄褐色土の混土に黒色土、黒褐色土が混入している。それぞれV、IVb、IVa、III層起源。土器片、石器、剥片、微細骨片、炭化物を多量に含んでいる。

盛土2層：黒色土と黒褐色土の混土でIII、IVa層起源。同じく土器片、石器、剥片、微細骨片、炭化物を多量に含んでいる。

盛土3層：黒褐色土、III層起源で土器片、炭化物を含んでいる。

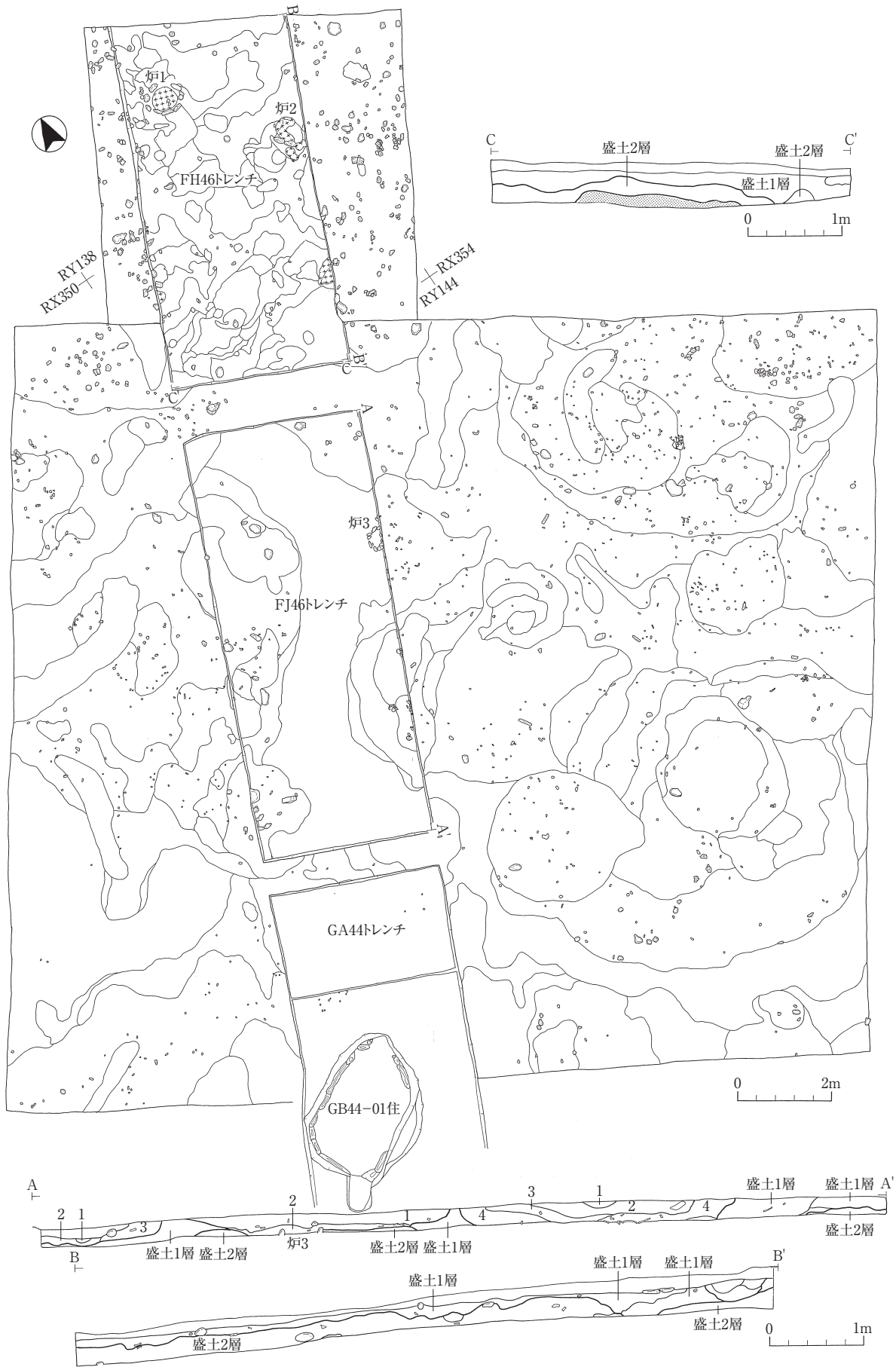
本調査区周辺では盛土層はIII層上に堆積しており、III～V層起源の層が基本土層とは基本的に逆転し堆積していること、配石遺構の周辺ではIII、IVa層を全く欠き、IVb層、更にV層を欠いている箇所もあることなどから盛土層は配石遺構群周辺を削平して盛り上げたものであることが判明している。また、GA44トレンチの調査では盛土層を取り除いた後、IV層上面でII期の竪穴(GB44竪穴住居)を検出している。

今回の調査では盛土層の平面プランを土色により分層し実測している。

調査区北側の分層では細かく層を分けることができ、繰り返し盛土層が細かい単位で掘り返されているようであるが、調査区東部～中央部では径3～7m程の大きな円形に分層できるところもあり、大規模な単位のものもみられる。また、盛土層底部は凹凸が激しく(第23図C-C')、このことはIIa区で検出された盛土層の調査結果と一致している。

平成4年度の調査では盛土中で石囲炉や地床炉、二次的な焼土ブロックなどが検出されており、盛土で繰り返し火が焚かれた跡が見つかっているが、平成4年度にFH46トレンチで検出した炉1、炉2に伴う掘り込みは再度土層セクションを吟味してみたが見当たらなかった(第23図A-A')、一方FJ46トレンチで検出された炉3は盛土中の大規模な掘り込みの底部で検出しており(第23図B-B')、同じ石囲炉でも性格を異にしているようである。

遺物は調査区全域から土器片が多量に出土している。土器片は層が繰り返し掘り返されているため細かいものが多く大方が3cm以下の非常に細かいものである。III B群(78、96、110、112、119、125)が約5割程で最も多いが、I群、II A群(58、59)、IV群(139)、V群(193、212)も含まれている。他に遺物は石鏃10点、石錐1点、土錘1点、盤状土製品1点が出土している。



第23図 IV区全体図

PL 8 IV調査区



調査区全景（東より）



FH46トレンチ（北より）



調査区全景（北より）



FH46トレンチ北部



FH46トレンチ炉1



FH46トレンチ南部



FJ46トレンチ



FJ46トレンチ